眺望の好き風景と眺望の好き風景とは別問題也

決して混同するを得ざること也、尤も、或點迄は、風景の好きと眺望の優れるとは一致すと雖も、或點以上は全く別也、爾る所以は、種々の點より之を論ずるを得べしと雖も、就中、極めて適切なるは日本に於ては、水蒸氣の或る度以上の作用を待つて、始めて十分に其美を成すべき風景を最上となすに、之に反して、眺望を以て優るの地は、遠眺を妨げらるゝを免るべく晴天の上に、水蒸氣の作用少なければ少なき程を好しとなす

を以て區別するに在りとなす、されば、十國峠の眺望は、春霞棚引く日、其他水蒸氣の多き時、即ち、日本の風景の最も美化作用を受くる時には、十分に其致を極むること能はずして、却つて、秋に入りて天高く氣澄める節を、最も其登臨に適せりとなす也、此に於て十國峠の

以て日本一の眺望となすべきも、以て日本一の風景となすべからざる

日本一の好風景に接した事實

や明らか也。

以上は、相州海岸の或部分が日本一の風景なりとの我說を有力ならしむべく擧げたる例に過ぎず。

扨て、予をして相州海岸の風景の美に打たれたる事實を語らしめよ。

房州の海岸は、富士山を望むべき適度の距離よりやゝ遠きを以て、最上となすべからず、相州海岸と雖も、江ノ島あたりは、適度の距離よりはやゝ近くして、富士を低く箱根、天城等を高く見るを缺點となすべく、七里ヶ濱の或る高所、葉山の長者ヶ崎、三浦半島の極端等を以て、其中間の適度を得たる所となす也、而して、三浦半島の極端即ち三崎に於ても、城ヶ島、歌舞島等の展望臺ありて、就中歌舞島を以て第一となす

は、既に予が述べし所也。

歐舞島は、名は島なりと雖も、其實、三崎町西端のやゝ海に出でたる岬角也、古へは島なりしを、海水の建設作用に依りて陸地と接

織するに至りたるものなるべし、高さは百尺にも足らざるべく、小松の疎らに生じたる、一見何の風致も無く、云ふに足らざる小丘なりと雖も、一たび此上に立つ時は、眼中の風景恰も大なる魔術に依つて化せられたるもの丶如くに變ずる也、蓋し

海及び陸に對する位置の宜しきを得たると、海及び陸に對する位置の宜しきを得たるに適せる高さを有せると、すべてが適宜なる

に由れりとなす。

予が始めて歌舞鴫の頂點に立ちて、相模灣の風景の美に驚きたるは、或る秋の末の晴れたる夕なりき、第一、夕風の或る一時が海面に微波の皺をも止めずして、熨したる如くに平からしめ、而も之に廣き範圍に渡りたる緩き動搖を帶ばしむるが、海にして海にあらず、湖の如くにして湖にあらざる特殊の美觀にてある也、而して、其色近きより遠くに層をなして、幾十百種の重複を示し、最も近きは光澤を消したるプラチナの如くにして、やゝ遠きは淡紅色に、之に所々黃色と褐色とを雜へ、而も、漸次に遠きに至るに隨て紫色を加へ行き、果ては濃き藍鼠色となり、更にそれ等の濃淡複雜幾十百種の色を混和して、黯澹の氣を籠めたる水靄を以て海の周邊を埋むるに至る迄、如何なる名手の畫も到底之を描き出し得べきにあらず、加之、下界は盡く水靄の中に埋もれて、房州の鼻頭より、大島、天城、箱根、大山を掛け、唯だ一刷毛に撫で消されたるに、富士のみ獨り半天に超出して、夕日の名殘を一面に受け、絶大なる瑪瑙の塊を薄紗に包みたる觀を呈する光景、口にも筆にも及ばず、なほ、富士より一段高き空中に雲の塊ありて、連綿として横さまに山海の上を渡り、大島のはとりに至りて其端水靄の中に垂れ、終に滅沒するを見る、其形は菩薩羅漢の一列をなして相並ぶが如く、其色は炎々と燃え立つ焔を其儘に氷らしめたるに似たり、滿眼の風景に明りと色とを與ふる最大要素は此雲の列にてある也、正に是れ、近き城ヶ島燈

臺の不動綠光將に輝かんとするの前、予は實に
こゝに始めて日本一の風景に接せり。

餘りに其秀でゝ美しきに心を奪はれ、息を凝らして睇めつゝある中、富士は恰も輕く柔かなる物の如くに見え來り、而も、飄搖して空に登ちんとするに似たり、之に呼吸あり之に脈搏ある所の活ける物の如くに見ゆ、既にして、富士は一刹那毎に人目を逃るゝが如くに遠く暗くなり行き、又、漸次に死滅し行くものに似たり、斯くて、著るしく遠く且つ朧になりたりと思へば、俄然眞黑々の缺け損じたる三角塔の如き形となりて、鮮やかなりし時より却つて甚だ近く、我に迫るが如くになりたり、同時に、夜の幕は世界を狹く包みて、城ヶ島燈臺の綠光始めて燦き出づ。

斯くて予は、風景に醉はされて跟蹌として歸途に就きぬ、實に、風景程予を動かす力あるものは無く、又、風景に動かさるゝ程、單に愉快にして毫も痛苦を伴はざるは無し、風景なる哉、風景なる哉。

◎松島の價値

其一　概括せる松島は俗的趣致

松島の風景として日本第一と許すべからざるは既に之を云へり、されど、何故に爾るかに至つては、未だ之を說かざる也。

今や、之を說くべき機會は來れり。

舟にて海灣の內を行く、前後左右皆島にして、島の上は皆松也、水よりも島多く、島よりも松多し、斯くて松島は極めて珍奇なる風景也、よくも、東西百八町、南北九十町とか云ふ小海灣內に、三百とか八百とかの數多き島嶼が、小學校の運動場の如き狀態を呈して寄り集まりたるものと、感に堪へしむべき風景也、先づ何人の好奇心をも動かすべき風景也、而して

殷やかにして御祭りの如き風景

也、されど、要するにたゞこれのみ、舟より打眺めたる所にては、これより外に云ふ所を知らざる風景なるのみ。

尤も、松島にても、時と日との氣象の作用に依りては、亦風景として鑑賞すべき價値無きにあらず、水蒸氣の作用が適度なる時、それが、朝の霧、晝の霞、夕燒、夜の朧をなす時、海紫に、島の松は煙の如き時、歷氣凝りて成りたる玉の如き月の吐かるゝ時には、近き島のみ實物と見えて、やゝ遠きは繪けるものゝ如く、更に遠きはたゞ影の如くにて、人をして覺えず賞讃の聲を發せしむるありと雖も、要するに

纖巧を以て優る小規模の風景

に過ぎずして、之を、瀨戸内のそれに比ぶるに、コセ〳〵然としたる俗惡なる趣味の者が、其作りたる箱庭の小細工に誇るが如き臭氣あるを免れずとなす、殊に、松島の遊覽を夏期に限りたるものとなすは其意を得ざる事也、夏の日にても、朝夕は比較的好し、されど、遊覽者は其都合を主となして、多く日中に於てする也、夏の晝の日は直射す、天は餘りに明らかに、海は餘りに青し、すべての島の地肌は灰色澀く醜く、松は黑々として幹も枝も葉も皆似たる色に見ゆ、風景に何の含蓄ある無く、たゞ其輪廓の珍妙なるが強く目に觸るゝのみ、之に對して、我れ松島を覽たりとなすは、隨分無理也。

兎に角、何れにしても、松島灣の狹小なる割に其島嶼のコテ〳〵と多過ぐるが疵也、而も、一般多數の人は、此、こぼるゝばかりに島の多きを喜び見る也、之を以て、松島は彼等に奇なり妙なりとせらるゝ也、扁舟徐に行く所、一島去つて一島來る、纔に群島の圍みを脫したる舟は、忽ち又他の群島に圍まれ、此の如くして何所迄も連續す、すなはち、松島は慾張りたる者に喜ばるゝ風景也。

されど、松島の風景を、單に舟より見たるのみにて評價するは大早計也、こゝに於て、松島の全部を眸中に收むべき展望の地を求めざるべからずとなす、案内記に曰く、富山、大麻森、多聞山、扇谷、

之を松島の四大觀となすと、即ち、共に展望に供せらるゝ高地也、而も、此中富山最も優れりと云ふと雖も、其地松島より東北二里の遠きにあるを以て、予は都合上未だ至り見ず、扨て其殘りの三つなるが、其中多聞山は新富山の稱ありと雖も、たゞ富山の如く遠からざるを利とするのみにて、其眺望は痛く劣れりと聞くが故に、これは訪ふの意起らず、扇谷は、松島の景を末廣がりの扇形に見るを以ての名なりと云へば、何と無く俗臭あるが如くに覺えられて、是も亦足を運ぶべく心進まず、是等の理由にて、予は獨り大鷹森に登りたるの經驗を有す。

大鷹森は宮戸島に在り、適切に云へば宮戸島の頂部也、而も、宮戸島は松島灣内第一の大島にして、群島を將ゐること兒孫の如く、最も好位置を占む、敢て富山に優れりと云ふにあらずと雖も、富山を除いては、好個の松島の展望臺なりとなす。

斯くて、我が舟の宮戸島に着したるより筆を起さん、明潤清麗にして眞に仙島也、廬を結んで此島に一夏を送らばと思はるゝ程也、而して少しく汗を出だせば大鷹森の頂點也、陸上ならば小なる丘に過ぎずと雖も、此島にしては是にても高しと云ふべし。

パノラマの如き風景、即ち人工的

展望すれば我知らず「あッ」と感歎の聲出づ、爾り、眞個の絶景也。

されど、予は何と無く、之に對してパノラマの如しと思ふことを禁ずる能はざる也、而も

パノラマの如しと思ふは何の故ぞ、予自ら予の心を捉へて詰問す、答へて曰く人工に似たりとなすの意

なりと、爾り、匠氣あるを免れざる松島の風景は、高所より之を展望するに至つて、益々其人工的趣致を加ふるを覺ゆる也、俗物が小細工の巧みに誇る所の箱庭を大きくしたるものに過ぎざるの感は、高所より展望するに至つて、愈々強くなり來る也、勿論其細工は實に巧妙也、其細工の巧妙さ加減、人をして感歎せしめ心醉せしむるに足れり、されど、眞に鑑賞眼ある者に喜ばるゝ風景と云はんより

は、寧ろ、有象無象猫杓子に譽めらるべき風景也、眞に鑑賞眼ある者が、見て以て味ふれども盡きざる妙趣を含めるものとなす所の風景をば、何の味ひ無しとなし、若しくは、漠として取止め無しとなし、或は淋しとなし凄しとなす所の、有象無象猫杓子に難有がらるべき風景なりとす。

予が、概括せる松島觀此の如し

其二　松島に限れる深き趣味

されど、流石に古來有名の勝地なれば、細かに探究したる結果、亦松島に限れる深き趣味の見出だされざるにあらざる也。

岸より遠からざる所に、雄島と云ふ島あり、粟粒を振り撒きたるが如き松島灣の群島中、比較的面積の廣き方にて、風致に富めるを以て名あり、殊に

月夜の雄島には人の魂を惱ます趣あり

と稱せらる、されば、予は、松島の大觀細視兩つながら試みて、其風景の氣の毒ながら日本の誇りとするに足らざるを知り得たりと雖も、なほ一つ、月夜の雄島を訪ふことを殘せるを以て、未だ松島の價値を確定するに足らざるを思ひ、一雷、六月七日ばかりの水霧に海るゝ月をたよりに、觀瀾亭のほとりより扁舟を儌ひ、夢裡の物に似たる雄島に渡りぬ。

此島、古へ釋見佛栖遲の所とか云ひ、土人は之を御島と敬稱す、古來有名の歌人が此島を詠じたる什少なからざる也、一島皆松にして、松間に幽徑あり、素朴にして清雅なる坐禪堂に通ず、僧頼賢が碑は、宋の寧一山の選並びに書也。

予の至りし時には、島上に一個の人をも認めざりき、月海くして松皆影の如く、而して、幽徑に印せる松影は煙よりも淡し、松籟は濤聲と和して、人の魂を搖かし、座禪堂のほとりに彳立して耳を澄ませば、天と地との呟ぐ聲を聞くの心地す、而して、其語の意味も

略ぼ解釋し得らるゝ如くなるを覺ゆ、歩して松間を穿ちて、波打際に立出づれば、煙波微茫として際涯無く、群島の中最も近きものゝみ、はのかに島に似たる形に見え、其他はたゞ水鷗の凝集したるものに似たり、人をして終に深き沈思に耽らしめ、根本的哀感の骨髓より湧き來るを覺えしむ、殷やかなることお祭りの如き風景として松島を見たりし予は、此に至りて案外の感に打たれざるを得ざりき。

松身を撫して惆悵しつゝ、自然に一首の歌を成す、曰く、「今宵我れ雄島の松に身を寄せて泣きぬと波よ人に傳へそ」と、嗚呼、此感此情は以て他の何れの島に於ても得らるゝものとなすべからざる也。

畢竟ずるに、強ゐて

松島を以て、廣からぬ灣内に多過ぐる島嶼を盛りたる所となせばこそ、其價値を疑ふ心にもなれ

雄島の月夜の趣一つにて、松島は確に千里の外より赴き訪ふの價値ある也。

特に松島に限りたる深き趣味

而も、松風の柔かさ加減、波音のゆるさ加減、周圍の風物の隱約として底に限り無き含蓄のある深き趣味、亦是れ普通の海岸に近き孤島とは趣異なりて、廣からざる海灣の、島嶼甚だ多き間に於ける、岸に近き比較的大なる島なる雄島に限れるものとなすべき也、殊に、其空氣の色が、北陸兩羽の日本海岸に於けるが如く黯慘たるにあらずと雖も、亦、瀬戸内及び東海道の海灣のそれの如く明麗なるにあらずして、其中間の或度なる、是れ、雄島の深き趣味を助くると共に

松島の風景を特殊ならしむる要素

にてある也、此に於て、雄島の風景趣致の尚ぶべきを以て、松島の風景趣致の尚ぶべき所以となすも、亦當らざるにあらざるを知るべし。

◎巖石の奇

其一　奇巖怪石の風景の價値

奇巖怪石を要素としての風景、即ち所謂火成岩の奇は、亦日本に於て多くの部分に之を見ることを得べきが、是れ、人の好奇心を滿たす點に於て價値あるにて、風景として最上の地位に置くべきものにあらず、たとへば、奇巖怪石を帶ばずして眞に美なる風景を演劇とするに、奇巖怪石を要素としての風景は手品、輕技、曲馬、球乘の類とせざるを得ざる也。

されど、奇巖怪石も亦地上の見るべきものにして、固より、平々凡々何の取るべき無き風景には優れり、加之、其奇を以て其正なるものを反照するに依り、純日本的なる極美の風景が益々發揮せらるゝなれば、奇巖怪石の風景亦輕んずべきにあらず、況んや、之に對して

男兒の豪氣を養ひ奇氣を養ふの利

あるをや。

此に於て、予の日本風景論は、亦奇巖怪石の風景を品隲せざるべからず。

其二　日本に於ける奇巖怪石の風景の概要

日本に於て、奇巖怪石を以て稱せらるゝ風景は、何れの地に在りや、曰く、豐前の耶馬溪、讃岐の小豆島、備中の豪溪、甲斐の御嶽、上野の妙義山、信濃の木曾の寢覺の床、陸中の五串溪、羽後の雄鹿半島等、其最も著名なるものにして、其他多く著はれざるものに至つては、殆んど到る所にありと云ふも不可無き也。

先づそれ等の概要を述べんに、耶馬溪は、一たび頼山陽が

耶馬溪山天下無

と激賞としてより、大に所謂文人墨客に注目せらるゝに至りたるものにて、豐前國山國川の上流沿岸十八九里、中に十三ヶ村を包含したる、溪谷の奇觀也、而も、中津町より三里なる樋田村の「鮎歸り」より奇景の範圍と稱せらるれど、今は、巖を碎き湍を緩くし、「鮎歸り」の名稱を無視して、自在に鮎の登り得る所となしたるより、此所未だ以て奇とするに足らず、更に進んで、佛坂より青ノ洞門に至れば、攢峰春筍の簇るが如き所、路は溪上を壓して通じ、洞門の傍より舟渡しに依りて對岸に至り、水を隔てゝ之を望めば、亂松倒まに斷崖に生じて、奇峰狂巒、或は天外に飛舞し去らんとし、或は水中に崩壞し來らんとするの間、行旅車馬、洞門を出入して往來す、宛然

文人畫卽ち支那畫的風景

漢文學者たる山陽外史が之れを激賞せしも至極尤もに思はるゝ也、

耶馬橋に至り、羅漢寺を訪ひ、口ノ林、柿坂、中摩等、巖石の奇怪、進むに隨つて益々加はり、神斧鬼鑿、人をして造化の工に驚歎せしむ、終に、旭橋より彦山路に入れば、有名なる英彦山に達すべく、又、柿坂より南方に分岐して、新耶馬溪の怪奇更に本溪に過ぐるものあるに接するを得ん、斯くて、一局部の怪奇、若しくは單に巖石の秀拔なる點のみに於ては、亦此地に過ぐるもの無しとせずと雖も

其範圍の廣く、巖石と流水と樹林との配合宜しきを得たる點に於ては、竟に、山陽の言に同じて、耶馬溪を隨一

に推さゝるを得ざる也。

小豆島の奇景に至つては、既に瀬戸内の條に於て大略を說きたれば、更に之を再びするの要無かるべし、たゞ云はん、奇にして雄なるものは、之を他に求めざるを得ずと雖も

奇にして清なるものに至つては

小豆島を以て最となすと。

次には、中國第一の奇勝と稱せらるゝ豪溪を如何にと問ふ、此地は備中國賀陽郡池田村大字槇谷に屬し、岡山市より眞金驛に至りて、國道より右折し、高梁街道に入り、總社、井尻野の二村を經、池田村大字宍栗より更に右折して、槇谷川の右岸に傍ひ、北行することゝ一里半、即ち岡山より七里半にして達すべし、此地の風景は

耶馬溪タイプにして而も一局部に限れるもの

也、耶馬溪より規模小なる代りには、其一局部に限れる風景の秀拔或は耶馬溪に過ぐるありとなすべきが如し、巉巖數十柱、雲を貫いて並立し、之に松を主となしての樹木の短矮にして蟠屈せるものを帶ぶ、而も、其中なる一大巖に「天柱」の二大字を刻せるものゝ、蘚苔に封じられつゝも微かに讀むべき、天工の奇に加るに人工の奇を以てしたるもの也。

こゝに又、耶馬溪に後れて世に知られたりと雖も、一たび其勝の著はるゝや、西方の耶馬溪をして亦名を縱まゝにすること能はざるに至らしめたる、東方の奇景あり、甲州御嶽の昇仙峽是れ也、此地に至るには、甲府より武田氏古城址の傍を過ぎ、一里許にして北相川村和田に至り、老松に蔽はるゝ和田峠を登ること十町許りにして、顧みて富士の偉觀を望み、又、甲府の人煙の紫なると笛吹川の水脈の白きとを近く脚下に瞰るべし、而して、峠を越えて丸山村を過ぎ、北行一里許にして、荒川の岸なる天神平に出づ、これより荒川の沿岸猪狩村に至るの間道、流水に逆うて進む一里半を昇仙峽の絶勝となす、溪を歷して兩岸皆山

其山皆巖にして、其巖皆花崗岩

也、雄偉を窮め奇峭を極む、而も、巖麓生ずるもの松及び雜樹にして、瘦勁の致云ふべからざる也、溪流亦之と相俟つて、忽ち急湍を飛ばし、忽ち深淵を湛え、其間奇巖怪石の起伏するもの應接に遑あらず、猿岩、富士岩、蟾蜍石等、各其形の似たるを以て名づく、斯くて、天保年間獨力を以て此間道を開きたる農夫孫右衞門の像に林鶴梁の

耶馬溪と御嶽との比較

贊を添へて刻せる碑石を看、巨巖將に倒れんとして未だ倒れず、一巖之を撐へんとして未だ撐へざるの間、毫髮の虧隙を存しつゝ、而も自然の洞門をなせる所を過ぎ、磨崖碑、雪虹瀑、浮石等を歷觀して、遂に昇仙橋上に立ち、顧みて覺圓峰の雄大奇拔言語に絶せるを賞歎し、之と相對立する遮雨岩の奮躍して闘ひを挑まんとするが如くなるに驚愕し、此二を圍繞せる百千の奇峰、相排し相出でゝ人の之を制止する無く、或ものは、之を調停せんとするが如く、或者は之を指嗾せんとするに似たるを覺ゆ、是れ昇仙峽中の極所にして、これより、銀鎖を束ねて懸崖に垂るゝが如き仙娥瀑を仰ぎ、巨巖を穿ちて洞門となせる所を過ぐれば、即ち是れ猪狩村にして、忽然として又凡山平水の間に入る、前の奇絶怪絶なるものを回想すれば、山靈戲れに一時の幻景を現せしものにあらずやと疑はるゝ也、之を要するに

其範圍の廣く、其局面の大なるは、耶馬溪遙に昇仙峽に優ると

支那畫的風景

妙義山の特長

雖も、一局部に奇景を攢集したる點に於ては、昇仙峽却つて耶馬溪に優る

也、固より、備中の豪溪の如きは、昇仙峽に劣ること數等なるものとなす、但し、之も亦

支那畫的風景を以て漢文學者に賞揚せられしが、世に知らるゝに至りたる初めなれば、其名稱支那的にして、却つて厭ふべき臭氣あるを覺ゆる也。

妙義山に至つては、流水の之に風致を添ふる無しと雖も

其巖石の雄大なる點に於ては他に類を見ず

となすべし、山は上野國北甘樂郡に在りて、磯部、松井田兩驛何れより至るも宜しく、妙義町迄、磯部より二里八町、松井田よりは一里十町也、先づ、石階を登りて、白雲山の妙義神社に詣で、それより金洞山に向ふべし、巨巖天腹を摩して自然の洞門をなすを第一石門と云ひ、之を過ぎて第二石門の奇峭大刀の如く亦半月に似たるを

見る、なは、第三石門及び第四石門ありと雖も、共に小にして凡に、到底、第一、第二と位を爭ふに足らざる也、妙義神社奥の院の傍に天そゝり立てる毘蒭岩の雄大には、何人も驚歎せざるは無く、危磴を蹈み、鐵鎖を攀ぢて、辛うじて其絶巓に達したる上、長嘯一番山鳴り谷響へて、大風脚下より起るの趣を領するは、實に男兒の快事也、而も、金鷄山の蠟燭岩の、獨立千尺巉として攀づべからざるは、更に一段の雄大、更に一段の奇拔にして、天柱の名、始めて之に許すべきを覺ゆ、其他、觀音岩、夫婦岩、虎ヶ石等、皆妙義山中の奇觀也。

水晶の寢覺の床とかけはし

岩石と流水との調和十分に熟せるは、木曾の寢覺の床也、木曾山中の都會福島町より西すること一里にして、「木曾の棧道（かけはし）」の古跡あり、兩岸迫る所、斷崖高く懸り、巨巖水を壓して湛えて淵をなさしめ、清澄能く數丈の底を洞觀するに足る、而も、巖と水との外は皆木曾に特有なる森々たる老樹なるを以て、他に殊なる風景をなす也、之より更に西すること一里、駒ヶ根村字上ヶ松に屬する、懸崖對立の谷底を行く川流に、奇巖怪石の一團を見るは寢覺の床也、巖石の中最も大なるは島をなして、上に數株の松を生じ、松間浦島太郎を祀るの小祠あり、其他、屏風岩、烏帽子岩、獅子岩、硯岩、腰掛岩、俎岩、浦島太郎釣舟岩等、各其形に依つて其名を成す、崖上に古刹あり、寢覺山臨川寺と云ふ、境内より俯して川に臨むの景を最も奇なりとなす、斯くて、寢覺の床の風景は固より小規模に過ぎずと雖も

巖と水との外は皆濃綠滴らんとする老樹にて、花崗岩の白と、水の青と、樹の綠と相映ずる

所に水晶的風景の特色を見出だすべく、之を要するに

清奇にして而も幽深

なるを寢覺の床の價値となす、小豆島の如き、此清奇はありと雖も此幽深は無き也。

水晶的風景の特色

五串と寢覺との比較

木曾の寢覺と相對すべき東北の奇景を陸中五串溪となす、漢文學者之にむづかしき文字を當て嵌めて嚴美溪と呼ぶ、一の關より山間に入ること二里、一小坂を登りて、岩井川の上流に接すれば、眼下に紺碧の深潭を挾んで、兩崖の巖石奇を爭ひ怪を競ふ、是れ即ち五串の勝也、溪に傍うて遡れば、歩々に趣を加へ來り、遂に一橋の空に架れる所に至り、溪脈の遠くより來るを望む、望中、玉瀧の急湍あり、清奇實に愛すべし、橋を渡れば南岸に一小堂ありて、多く遊客の名を題し、傍に勝を記せる碑文あり、松崎慊堂の選文にして白河樂翁の題額也、之を他に比ぶるに

清奇にして而も小規模

なるは寢覺の床と相似たり、たゝ、寢覺は清奇の上に幽深なるに、五串は、岸上松を主としての雜樹を見ると雖も、未だ幽深の趣を成すに足らざるを以て、一段寢覺より劣れりとなす。

以上列擧し來りたる所の内、流水の助力を藉らざる妙義山を除くの外、すべて皆

所謂、火成岩と流水の浸蝕と相俟てるものにして、或る一部の人の以て日本に於ける最も尙ぶべき風景となす

所也、而も、怪奇を以て優るの地が、風景として如何程の地位にあるものなるかは、既に予の說きたる所なれば、再び之を繰返さゝるべし。

其三　日本に於ける最も雄大にして且つ怪奇なる風景

日本に於ける奇巖怪石の風景の中、其最も雄大なるは之を妙義山に見るべく、其最も怪奇なるは之を御嶽昇仙峽に求むべし、而も、雄大と怪奇とを兼ね備へたるものに至りては、耶馬溪を推すの外無きが如しと雖も、兩つながら兼ね備ふる代りには、雄大の度も怪奇の度も、未だ其極に至れりとして許すこと能はざる也。

雄鹿半島

他に類無き風景

此に於て、奇巖怪石を要素となす所の風景の中

雄大怪奇兩つながら兼ねて、而も其度の共に極まれるもの

を求めて、予は羽後の雄鹿半島を得たり、但し、亦是れ此に盈つれば彼に缺くるの通幣を免れずして、他の地の如く、奇巖怪石に添ふるに樹木を以てするにあらず、單に赤裸々なる巖石の起伏を見るのみなるが、雄鹿半島の無上に尊重すべからざる所以なりとす。

雄鹿半島の奇は全く他に類無きもの也、其

海中及び海岸に火成岩露出して、而も雄大奇拔を極め、一糸の樹木をも帶ばして、全然赤裸々に、終古狂瀾怒濤と惡戰しつゝある、凄く恐ろしき風景

は、風景と云ふべくやゝ過度なるが如き也、他に全く海中及び海岸に於ける火成岩の露出を見ること能はずと云ふにあらず、否、寧ろ他に此類の奇觀多しとすべしと雖も、雄鹿半島の如く、過度なる程怪奇なるは斷じて他に無く、これよりやゝ劣りて之と匹行すべきも

容易に別るを得ざる地

のすらあらざる也、即ち、單に怪奇てふ點に於ては、雄鹿半島は嶄然獨立せるもの也。

第一、雄鹿半島の奇景は容易に到り見べからざるもの也、巖怒り濤驚くの間に小舟を操りて、巧みに顛覆を免れつゝ回覽すべき所なれば、天候少しく常を失ひ、或は天候に申分なしと雖も風の方向宜しからざる時には、態々其傍迄至りても、空しく憾みを呑んで歸らざるを得ず、而も、其傍に至るさへ、瀛車無き僻地の路を十里ばかり歩まざるべからずとなす、されば、折好く一度にして目的を遂ぐるを得る者無きにあらずと雖も、廻はり合せ惡き者は、數日途中に滯在し、若しくは、毎年一回づゝ赴きて數年に至るも、なほ奇景に接するの緣無きを嘶つ也、予の如きも、三度カラヌを食らつて四度目に始めて希望を滿足したり。

雄鹿半島の奇景を探らんには、羽後國南秋田郡船川港より船を發するが普通の方法なれど、これには、數人乃至十數人團結しての大

設備を要するを以て、單獨或は二人ぐらゐならば、船川より門前村迄三里の海岸を歩行して、途中の奇景を賞しつゝ、門前よりは、眞に葉の如き獨木舟を儲うて、細かに巖石の間を縫ひ歩くを優れりとなす、而も歩行三里の奇景は、船川より船を發する者の接することを能はざる所也。

門前より加茂迄の海上三里間は奇景の中心にして、加茂より戸賀迄の三里も亦甚だしく之に劣らず、總じて、船川より一里ばかりなる女川の海岸を起點として、これより戸賀に至る約八里間を奇景の範圍となす也。

頼三樹三郎一たびてゝに至りて

男兒一搜雄鹿島、松洲始覺屬妖嬌

と云へり、松州は、即ち松島也、松島を雄鹿に比ぶれば、人に媚ぶるが如き俗景に過ぎずと云ふ也、雄鹿の巖石の雄大怪奇なるは、龍ケ嶋突兀として波を拔くこと二百尺にして且つ痩削し、石の如くならずして樹の如く、眞個に活龍の天に昇る勢ひあり、大棧橋海中に自然の石門を成し、其下、檣を立てたる船を通すべし、蒿雀窟に至つては、方數間の洞口、巨獸の水を吸ふが如く、船を進めて直に其咽喉に入るべし、洞内波響百雷を崩し、其巖皆五彩の紋をなして水の紺紫なるに映ず、岸頭に聳立するもの、亦皆雄大五六百尺に上り、龜の段、舞臺岩等最も奇に、八翅の怪鳥、六首の妖獸、紛糾して混鬪惡戰す、更に、之に掛りて銀河を九天より下すの瀑布、亦一にして止まらず、大瀧、白糸瀧の名ある也、其他奇巖怪石の多きこと、其幾百千なるを知らざる也、加之、巖石獨り形狀の奇怪を以て優れるのみならず、其色彩亦多種にして、或は全然玄武岩の本色を發揮せる深黑漆の如きあり、碧色にして翡翠石の如きあり、白色にして大理石の如きあり、やゝ紫を帶びて水晶に似んとするあり、相掩映して波濤の間に硬質の百花を開く、なほ擧ぐべき點あり、海底全然巖

石を以て成立ち、水を濁らすべき塵も無きを以て、清澄無双、數十丈の底も亦透視すべく、而も、萬種の海草之に附着し、黒き物、赤き物、白き物、青き物、黄なる物、紫なる物、是等の中間の色なる物、其形狀亦多樣に、帶の如き物、髮の如き物、手の如き物、足の如き物、死せるが如き物、活けるが如き物、一々枚擧するに堪へず、且つそれ、海草の繁茂する所即ち魚屬の都府也、鯛、鰈、章魚、鳥賊等、出沒遊泳して其生を樂む、是等のすべての物相俟ちて海底を嚴飾し、凄き事身震ひするが如く、美きこと心逝くが如き光景を成す也、豈之を稱して天下の奇と爲さゞるを得んや。

而も雄鹿の風景が、單に巖石のみにして毫も樹木を帶ばざるは、其無上に尊重すべからざる所以なること、既に述べし所の如し、勿論、斯く云ひたりとて、予は松島を例として、すべて此所の巖石の上に松あらざるを遺憾とする者にあらず、此所の巖石は、松島のそれの如く脆弱なる水成のものとは異なれり、松を生ずべく餘りに堅

硬也、且つそれ、此所の巖石若し松を生せば、恰も山門の仁王の頭に花簪を挿さしめたるが如く、不調和至極の現象を呈せん、されど、予は敢て曰ふ、此奇巖怪石の間、土岬の水に伏すありて、之に千年の老樹の龍に化せんとする俗念さへ忘れたる頑悠なるものあらしめ、海神の祠堂の堅牢精巧惟れ極まれるものが、年代と苦鬪して僅かに其骨を存しつゝ尙ほ儼立せるを置き、更に、巖石の外、一島やゝ大なるものゝ土を衣とせるものを添へ、之に精靈を藏せる老樹十數株と、鮫鰐を見ること鰯か鯖の如くなる漁豪の家二三とを寄らしめば、庶幾はくは、雄鹿の風景の單調を救ひて、給くべく歌ふべきものとなすことを得ん也、現在のまゝにては、雄鹿の風景は、松島の如く俗氣を帶ばざるを取柄とすべしと雖も、實際、たゞ其怪奇に人を驚かしむべきのみにて、一見すれば直ちに其內容盡き、人をして、玩味して鑑賞し、鑑賞して詠歎するの餘裕を有せしめざるを憾む、元より、之を給き之を歌ふの範圍にあらざる也、如何に敲き如何に搾

雄大怪奇なる風景の價値

雄鹿の經奇中の二大怪奇

りても、餘韻と餘情とを生せしめ難き也、極端に云へば

寧ろ畸形物を喜ぶ所の趣味低き俗輩を喜ばしむべき風景

にてある也、されど、人亦雄大怪奇の趣味を解せざるべからず、爾らずんば、其氣餒え其膽縮み、遂には頽廢して用ふべからざるに至らん、此に於て、天下に雄大怪奇なる事件あり、雄大怪奇なる文章あり、雄大怪奇なる建築物あり、皆以て、人を活かして以て國を活かし、人を活かし國を活かして以て世を活かすに足る、而して

雄大怪奇なる風景は實に自然の雄大怪奇なる文章

也、自然の雄大怪奇なる建造物也、其、人を活かし、國を活かし、世を活かすの力、亦肯てそれ等の人工物に讓らずして、而も、人工物の如く之が爲めに生命財産の犧牲を要せざる也、此に於て、日本一に雄大怪奇なる雄鹿の風景、亦大に重きを置かざるべからざる也。

更に聞け、雄鹿の雄大は以上を以て其概要を知るべしと雖も、其怪奇に至つては、なほ未だ語りて詳かならざるものある也、雄鹿の

怪奇の中更に二大怪奇あり、一は舟隱しの窟にして、他の一は白糸瀧の水源也、舟隱しの窟、其名よりして既に物凄きにあらずや、是れ、蒿雀窟と同じく海に向つて開きたる洞口なりと雖も、其外觀に於ては左迄取る所ある無し、蒿雀窟に比して規模狹小也、されど何等の奇怪ぞ、海水は恰も吸收せらるゝが如く、滔々として斷えず此窟に侵入し、而も再び返り來らず、若し舟ありて過つて之に近づかば、是も亦忽ちに吸收せられて、人力を以て中間より返ることは能はざらん、人も舟も諸共に隱されて再び出でざるが故に舟隱しの窟と名づけられたるにて、其粉となりて散るか、泥となりて流るゝか、或は妖魔と化して永く此底に生存するか、爾らずんば、此底別に世界ありて、新たに其住人の數に加はるかは、たゞ神之を知るを得るのみ、古へ此窟の怪的作用が明らかに知られざりし時には、過つて犧牲となりたる舟と人とが少なきにあらずと云ふ、加之、今日も雖も、之に近づきて木片

を波に浮ぶる時には、直ちに矢の如く進みて入り、一日之を待つも再び出で來らざる事實を見ると、或は曰ふ、雄鹿半島の中部に瀧の頭と呼ばるゝ所あり、更に其氣配無き平地田疇の間より、水を噴いて空を衝くこと、終古輟まず、其末流川を成すに至る、是れ、舟隱しの窟に吸收されし海水が、地中を通過する間に鹽分を漉され、淡水となりて出づるものなりと、されど、是と彼との間の關係の有無は容易に定むべからずして、舟隱しの窟に海水の吸收せらるゝ理由も、亦學者の十分なる研究を經ざれば明かにすること能はずと雖も、兎に角、其奇怪なる事實は蔽ふべからざる也、なほ、白絲の瀧の水源に就いても亦異聞あり、曰く、本山の中峻峭にして人の到るを得ざる所を過ぐれば、他と獨立せる溪谷あり、其巖石盡く水晶質にして皎々、滿地薄荷の外に草木を生せず、其香味猛烈なること他の產に絕す、谷底黯澹たる所、水ありて巖際より湧出す、之を飲めば人立どころに死す、而も、清徹玻璃の如く、冷峭にして肉を縮ましむ

と、即ち是れ白絲の瀧の水源也、蓋し、好奇非常なる者にして、特に跋涉の具を用ひ危を冒さば、辛うじて之に至ることを得べしと云ふ、予が之を稱して二大怪奇となすこと誇大に失せりとなす歟。

終りに臨んで、予は繰返して前言を總括し、特に雄鹿半島を擧げたる理由を明らかにせんとす、曰く

予が特に雄鹿半島を擧げたるは、日本に於ても、此の如く極度なる雄大怪奇の風景ありてふ事實を一般に知らしむると共に、雄大怪奇は如何に其度高しとも、決して最上の風景となすべからずとの、予の所說を强むる爲め

なりと、尤も、國と地とに依りては、雄大怪奇の風景の外に見るべきもの無きあれば、斯る場合は、雄大怪奇なる風景を以て、其國其地に於ける最上の風景となすの外無しと雖も、日本に於ては、此の如く風景の奇なるものにも富むと雖も、更に多く風景の正なるものに富むを以て

日本に於て奇巖怪石の風景尚ばるゝに至りたる時代

其正なるものゝ中より最上の風景を選ぶべし

となす也。

其四　日本に於て一時奇巖怪石の風景の最も尊重せられし理由

日本に於ては、古へ多く奇巖怪石の風景を尚ばざりし也、日本に於て

奇巖怪石の風景の最も尚ばるゝに至りにるは徳川時代

に入りてよりの事也、其理由一には、奇巖怪石の風景は皆僻陬の地に在るを以て、古への歌人などに知られざりしにも在るべけれど、なほ一つは、徳川時代以前には、主として

淡中に深味ある純日本的風景

が賞美され、京都、奈良、琵琶湖、瀬戸内、富士見ゆる駿河の海濱、武蔵野等を尚ぶ風ありしが故なるべし。

然るに、徳川時代に入りては、漢學勃興して海内を風靡し、經學者、漢文學者、漢詩人等、簇々として輩出するに至りたるより、隨つて、文人畫と稱する支那畫無上に賞美せられ、頭大に裾窄まりて、いやが上に圓子を積み重ねたるが如き山、斧にて削りたるが如き絶壁、之に懸かる飛瀑、危うして墮ちんとする小亭、險にして渡るべからざる破橋等を描けるものを、床の間に掛くるにあらずんば、俗惡にして共に語るに足らざるものと目せらるゝを免れざるの勢を成すに至れり。

此に於て、實地の風景に對しても、支那畫に多く見る如き奇巖怪石のそれに多く目を引かるゝに至り、奇巖怪石の風景を探りて

我れこそ日本一の風景を掘出したる名を博せんと

鵜の目鷹の目競爭の次第となり、此巖は董巨の筆意なりと云へば、彼石は倪黄の手法なりと稱して、風景とさへ云へば巖石の奇怪なるものゝ外に擧ぐるもの無しと思ひ、終には

奇巖怪石を尚ぶは俗物なりと時代とあなき

風景とは奇巖怪石の代名詞なるかの如き風をなすに及べり、即ち、頼山陽が耶馬溪を日本一と賞すれば、林鶴梁は御嶽昇仙峽を日本一と贊するの始末にて、奇巖怪石の風景方に時を得來り、同時に漢文學者の手に依りて支那的形容を加へられ、其名稱に迄も支那的臭氣を帶ばしめられて、遍く世間に紹介せらるゝに至りたる也。

されば、古來最も尊重せられたる、瀬戸内、駿河の海濱等の純日本的風景のそつち退けにせられたること勿論にして

奇巖怪石の風景を無上に尚ばざる者を俗物となす

の時代を生じ、同時に、俗物倶に語るに足らずと排斥せらるゝが口惜しさに、猫も杓子も、奇巖怪石を無上の風景となすの時流に雷同するの風をなせり、曷んぞ知らん

淡中深味ありて味ふれども盡きざる純日本的風景

奇巖怪石の風景は無上の尊重すべきは、支那的趣味にして日本的趣味にあらざる

を鑑賞するの審美眼を有せずして、畸形物に過ぎざる巖石のみを尚ぶ者の却つて俗物なるを。

之を要するに

奇巖怪石の風景を無上に尊重するは、支那的趣味にして日本的趣味にあらざる

也、日本に於ては、風景の奇なるものゝ尚ぶべき以上、其正なるものゝ尚ぶべきある也。

然るに、こゝに怪むべきは、今日に至りても、なほ此支那的趣味の感化を脱すること能はずして、漢文學者の舊套を襲ひつゝ、依然として奇巖怪石の風景を日本に於ての最も尊重すべきそれとなす者の少なからざる事也、更に

支那的趣味の上に新衣裝を施して、火成岩を云々し、流水の浸蝕を云々し

つゝ、奇巖怪石の風景の無上に尊重すべき所以に、新式なる説明を

奇巖怪石の風景は支那趣味の上に無上の尊重すべきそれとなす者

與へ得たりとなす者に至りては、其淺薄最も哂ふに堪へたり、是れ宛も、辮髪を捲いてシルクハットを戴き、以て、我れは最も進歩せる文明人なりと誇るの滑稽に似たる也。

裸體的風景と衣裝した風景

◎喬木美の日本

其一　老木大樹の價値

日本は樹木の國也、最も好く樹木の育つ國なると共に、最も好く樹木の育てらるゝ國也、而も、育つは國土の自然にして、育てらるゝは人爲に俟つものなれば

日本に於ては、國土國民共に協力して喬木を造るべく要しつゝある

を知るべしとなす。

實用上の問題は本書の範圍外なれば敢て謂はず、之を風景上より見て、樹木は實に風景の衣裝也、樹木無きの風景は裸體的風景也、更に進んで細かに云へば

草無く木無きは全裸體の風景にして、木無く草あるは裸體の上に襦袢を羽織りたる風景、草あり木ありて、始めて滿足に衣裝

したる風景となし得べき也、而も、雜樹は粗服、花木は美衣喬木に至りては儼然たる衣冠の姿也、故に

風景は喬木を衣裝となして、始めて崇敬の念を以て對すべきものとなる

也、斯くて、何れの國何れの地に於ても、風景上喬木の尊重すべき意義は異ならずと雖も、殊に日本に於ては

松、杉を主となしての喬木が、其特殊の風景を成す最重要素なれば、實に

一樹の喬木の貴きは、それと同じ大きさの珊瑚樹に匹敵すとなすべき也。

今、便宜に隨つて、喬木の十分に生長したるものに概括的名稱を下し、之を

老木大樹

と呼ばんに、老木大樹は實に國土の至寶也、之を風景上より見るも、之を實用上より見るも、將た之を國民精神上より見るも、其價値共に甚だ大也、日本の國土は幸にして老木大樹に富み、日本の國民は賢くも老木大樹を護り、以て、精神上、實用上共に、滾々として盡きざる固形の原泉を供給す、殊に其

奇正の中間適度なる姿態と、疎密の中間適度なる枝葉とを以て、或は單獨に、或は數樹相倚り、或は十百千萬樹相集まりて、世界に特殊なる日本の風景をなすに於ての價値

は、吾人が最も尊重する所のもの也、實に、樹木の姿態及び其枝葉の密度と日本の風景との關係は、極めて重要の問題なりとす。

憂慮すべき傾向

然るに、近時日本に於て、老木大樹の存在が重きを置かれざる如き傾向を見るは、甚だ憂慮すべき現象也。

乞ふ、之を精神上、實用上、及び風景上の三意義を合併したる、一の概括的問題として處理せん。

聞く、寺院に於て鐘樓の傍に植えられ、朝夕鐘の音を聞きつゝ育ちたる桐は琴の材に用ひて最も好き音を發せしむべしと、それ爾らざるを得ざるの理也、此意義や、空漠たる舊式の思想を以て解釋すべからず、又、此事實や、舊式のたとへ事に引くを許すべからず、實に是れ哲學的にして且つ科學的也、中に

或る生命の作用する

を窺ふべき也、而も、琴の材に用ひらるべき程に成長したる桐の木は、殆んど日本に絶せんとすと云ふ、心細き次第ならずや。

琴の材に用ひらるべき程、國土に育てられ國民に護られたる結果を表彰せる桐の木に、現下の日本に於て其殘存せるもの、全國を通じ僅に數幹なるべく、殆んどすべて支那に輸入を仰ぐ狀態なりと云ふ、桐は他の木に比して成長速に、女兒の生れたる時宅隅に植え置

一の人過ぎなる木損害殺すに一を切はるこりとに

かば、其嫁入の時迄には箪笥を造り得るの大材となるべしと聞くに、それすら、琴にすべき程成長せしめられずして切倒さるゝものゝみなりとは、我が國民が今日主義の傾向、實に驚くに堪へたり、今日主義の國民には

確然たる將來無き

也、我國の前途悲觀すべからずや。

以上は單に一例のみ、すべて其木の類の何たるを論せずして、時として

一木を切るの損害は一人を殺すに過ぐる

ことあり、若し夫れ、三百年の老木一朝にして倒れば、直ちに之に代るべきものを植ゆるも、再び前日の亭々雲霄を摩する雄姿を見んには、更に數代の人を亡ぼして三百年の星霜を閲し去らざるべからざる也、況んや、一の老木の倒されたることに依つて、其地氣人心に與ふる無形の影響の大なること、凡庸の徒の十百人を失ひしに過

ぐる場合無きにあらざるをや。

山林亂伐の禁ずべきは、獨り洪水の害を生ずる虞れあるを以てなるのみならず、又、老木大樹が實に國民精氣活力の根源なるを以て也、老木大樹無き山よりは達人高士を産せず、老木大樹無き野よりは英雄豪傑を生せず、老木大樹無き町よりは志士俠者を出ださず、老木大樹無き村よりは烈夫義徒を起さず、故に

或る意味に於ては林政は政治の根源

也、外交及び軍事よりも重大也。

更に大問題あり

老木大樹に貧なる國は偉大なる詩人畫家を出だすこと能はず

老木大樹を尊重せざる國は詩人畫家を虐待する國也、此言、老木大樹と風景との關係に於て予が道ふべき限りを盡くせり。

以上の見地よりして今の政治家なる者に對するに、其淺薄俗惡なること實に驚くに堪へたり、彼等は迂濶にも、地方の市邑村落に於

老木大樹と風景との關係を極言す

ける數多き神社を無用の長物となして、保存困難の名の下に、相近き數社を一社に合併せしめ、一社以外を取毀つの方針を取りつゝあるにあらずや。

思へ、地方に於ては、其大小と流行不流行とを問はずして、神社のある所必ず老木大樹の保護せらるゝ所なるを、縱令それ等の神が他に何等の靈驗無しとて、單に

至重至寶なる老木大樹を保護しつゝ、其存在を持續せしむる一點のみにて、人間の有象無象千百人の愚なる祈願を納るゝに優ること億萬なるの靈驗

と云ふべき也、故に予は、老木大樹を保護せしむる必要より、如何なる屁ッ鉾なる小神社、及び、神と佛との合の子、神と獸、鳥、蟲或は幽靈、妖怪との合の子などを本尊となしたる、怪しげなる破れ祠、辻堂等にも、國民をして齊しく敬意を表せしめんことを主張す、何となれば、是等

阿彌陀佛及び耶蘇基督より奪き樹木

を輕蔑して他に合併し、若しくは廢棄すると共に、今迄是等に保護せられて存在し來りたる老木大樹は、分秒の猶豫だも與へられずして、直ちに、トタン板を張りたる如き頭腦を有せる淺薄俗惡なる種屬の、冷やかなる斧に見舞はるべければ也、否、此種の惡例は、既に幾たびか吾人の眼前に繰返されたり。

なほ、此主張よりして、予は、たゞ、路傍一片の石に過ぎざる地藏にも、庚申にも、馬頭觀音にも、道祖神にも、道鏡樣にも、其他得體の知れぬ異形の石にも、齊しく眞面目なる敬意を拂はんとす、若し夫れ、樹木それ自身にオーソリチーとして、腰に神聖を標識するの注連繩を張られつゝ、自ら己れを保護するものに至りては、崇敬の念と愛好の情とを、兩つながら搾りて之に注ぐべく

其尊きこと阿彌陀佛及び耶蘇基督に過ぐ。

此に於て、予は又大に迷信に贊成して、迷信を嘲笑するハイカラ野郎の生意義を罵倒せざるを得ず、迷信頗る結構、天つ神、國つ神、

製紙原料として樹木を消費せらるゝのを憂ふる

八百萬の神、其他一夜造りの素性怪しき神達と雖も、皆之を信じて之を敬すべし、之を禮拜すべし、何となれば、彼等は皆老木大樹の保護者なれば也、彼等が老木大樹の保護者たるは、疑ふべからざる確かなる事實なれば也、神或は佛が冥福冥罰と云ふが如き、證據の無き事とは異なれば也。

それにつけても、文明の進歩に隨つて、書籍、新聞、雜誌、其他刊行物の增加する勢ひ盛に、紙の需用日に月に率を高むるに伴ひ製紙原料としての樹木の消費せらるゝこと夥多なるは、實に深く憂ふべき現象也、北米合衆國の如きは、製紙事業てふ暴威の下に、老木大樹の屈殺せらるゝこと餘りに夥多に、其山野は爲めに古き綠を失ひ、早晩木材に窮するの時至るべしと云ふ、是れ、日本に取りての好個の般鑑にあらずや、亞米利加の如き利の外に物無き國はそれにても好かるべきが、日本が木材の原料たる立木の缺乏を感ずるやうになりては、何も蚊も御仕舞也。

乞ふ、之にも亦風景觀を以て對せん、天を摩するの大樹が無慘に伐り倒されて白色の薄片となる迄に、多くの時を費さしめざるは、所謂文明の技術の誇り也、されど、地球に於て樹木の綠と其花の白との如く美麗なるものは無きと共に

其一旦化學的作用を與へられて、紙てふ白色の薄片となるや、變じて、風景上是程醜汚なるもの無き

に至る也、地上及び水中に紙片の散亂したる程、人に醜汚の感を與ふるは無き也、かの燒討騷動の際、一時國民新聞の印刷を引受けし秀英舍が襲撃を受けて、夥しき紙の屑を路上に散亂したる時には、之を傍觀したる予をして、世に此の如き殺風景は無しと思はしめき、實に、襤褸を取散らしたるよりも、薩摩芋の皮を振り撒きたるよりも、更に〳〵醜く汚き光景にてありし也、されど、予は風景と調和せずとて紙の價値を無視する者にあらず、たゞ、風景の最重要素なる樹木が、或る化學的作用を與へらるゝことに由つて、毫も風景と

調和せざるものとなるに、深き感慨を催せるのみ。

我等の小著にも、亦費さるゝ紙量の少なきにあらざるを見る、予の如きも、木を紙となすの作用に對し、いさゝか與つて力ある者也、斯く思ひ來れば、我が罪恐ろしくなりて、今現に執りつゝある筆の特に重きを覺ゆ

速に、樹木に代る製紙原料の見出ださるゝに至らんことを希望する

の情に禁へざる也。

樹木を保護せよ、殊に老木大樹の存在持續を保護せよ、是れ、人類の事業として最も意味深遠なるもの也、近時日本に於て、老木大樹の存在が重きを置かれざる如き傾向を見るは、獨り、本書の問題たる風景觀の立場よりしてのみにあらず、精神上及び實用上の問題に於ても、亦憂慮すべき現象なりとなす。

其三　予が觀たる喬木美

喬木には、年代に成就されたるそれ自身の壯美と、年代に打勝ち來りたる可能力、及びなほ多く年代に打勝つべき可能性に對しての、觀者の讃歎が成就する所の森嚴とあり、建築物の年代に打勝ち來りたるもの亦尊ぶべしと雖も、未だ、喬木の活物にして、其生命を以て年代と戰ひつゝ打勝ちたるに如かずとなす、予は、喬木の老大なるものに對する毎に

活ける英雄に面するが如き感

を起さゝる能はざる也。

杉、檜、樅の蟲々として塔を立つるが如くなる、松の矯々として龍を騰らしむるが如くなる、銀杏樹の天を掃ふ箒の如くなる、楠の森嚴なる、槲の遒勁なる、板谷楓の碧明なる、欅及び山毛欅の蒼深なる、皆それ〳〵の特色あり。

予は現に中根岸に住みて、日々小樓より上野及び谷中の森を望み

つゝ、其老木大樹が、煤煙の毒に中りて漸次に立枯れとなり來れるを惜むこと非常也、是れ、上野停車場に發着する滊車の所爲にして、煤煙中に含有せらるゝ亞硫酸瓦斯の作用なるが、此毒瓦斯の作用は、比較的針葉樹に多く結果し、濶葉樹は其害を受くること少なきものなるを以て、予が見る所に於ても、全く枯槁し及び半ば枯死に傾きつゝあるものは、皆杉或は樅にして、其戟の如き尖鋭なる形狀、人を壓して寒く、强ゐて鴉を綴りて葉となして益々冷かなる趣を加ふるに、欅其他の輪廓に圓みを持てる木は、依然として繁茂の姿態を失はざるが如し、それにしても、上野、谷中の老木大樹が漸々枯死に傾きつゝあるは、蔽ふべからざる事實なれば

東京に生命の原泉を供給すべく、其部分々々に象嵌せられたる自然界の碎片の中、此最も大にして且つ最も自然的なるものを保護するの方法を講ずるは、市の事業として現下の急務なるべし、但し、今日上野に於て最も優秀なる老木は、摺鉢山の前に在る耳を

梨の古木の美

生じたる樺なるが、これは煤煙の害毒に遠ざかりたる所に位置を占めつゝあれば、予をしていさゝか意を強うせしむる也、實に、此樹が若葉したる時、又、濃き綠に蔽はれたる時には、上野の森の中心はこれにて、滿山の風景すべて之に引寄せらるゝを覺ゆるぞかし。

梨の木の年を經たるものは、切れば血を流すと云はるゝ程、それ程、人に靈ある感じを與ふる也、これも、太さは二人にて圍むべくして、其高さ數丈に及ぶものあり、實を取る爲めの川崎にのみ梨の木を見たる者は知るまじけれど

梨は元來、實を取るよりも花を見るべき木

也、冷艶之に過ぐるもの無く、而も沈着にして寂味を含み、四隣を押鎭むる力ありて

數丈の大樹が花に蔽はれたる時は、夜の闇をも明るくす

べし、蕪村の句に

梨の花月に書讀む女あり

東京附近の梨の老木

辛夷の特色

と云へるは、よく其氣高く沈着きたる趣を表はし得たり、加之、梨の老木は枝振甚だ面白く、之を裸木の時節に見ても興あるものにて、而も、斯る大樹は、何所に行きても片山里に好く見出ださるゝ也、東京附近にては、多摩川の上流日向和田にて滝車を降り、川に傍ひたる崖の上の路を遡りて行かば、可なりに古き木を彼方にも此方にも見出ださん、但し、花を多く着くる年と其休み年とあれば、其必得にて赴き見るべし、第一其香が得ならず好し。

確か陸放翁の詩に

辛夷發高枝

と云ふ句ありしを記憶す、辛夷はコブシ也、此木も亦頗る高く伸びて、他の季には左程目に立たざれども、其青白く巨大なる花を隙間無く綴り連ぬる時に於ては、春ながら、桃よりも櫻よりも著るしく人目を引く也、遠目に明らかなること、此木が花を開く時に過ぐるは無し、殊に

三千尺の高地の大欅

月夜は此木の花の特色が發揮せらるゝ場合にて、更くるに隨ひ妖氣を帶び來る

を變ゆ、田舍の風景に、此木一本の爲め、遠き村の明るくなりて見ゆるは、最も心地好きものにて、東京にても、山の手の奥を探り歩かば、いくらにても見出ださるべし、駿河臺邊にさへ此木のある家を見る也。

欅の雄大なるものは、予之を武州御嶽山の上に見たり、御嶽山は、頂上に迫りて堂々たる大厦高樓の部落あり、予の此山に遊ぶや、毎に舊御師片柳氏の家に宿す、其家の樓頭より仰いで崖上を望めば、當に五人を以て圍むべき瘤々連結の大欅樹あり、八面に枝梢を走らして、形貌甚だ雄偉也、而も

此匹儔少なき大樹を三千尺餘の高地に見る

が故に最も奇となす也、蓋し其地點と關聯して何人も忘るゝ能はざるべきものとなす。

山毛欅の深林をなすと、水なして空渇を忘るゝ氣

老木大樹と盆栽的姿勢

欅より山毛欅を聯想せり、羽後國鳥海山に登るべく、矢島よりすれば、先づ三里の裾野を經て、次には三里の森林に入る也、此森林は殆んど全體が山毛欅にて、中には、千年の古木、夜、詩を吟ず底のものもあるべし、皆佶倔として、蘚苔を被ること鱗の如く、地高きが故に肉瘦せたりと雖も、長け各數丈に及びて、蒼龍飛舞の態を競ひ、爽々涼々として天に碧羅の傘を張る、此間の

空氣は玲瓏たる寒玉を吸ふが如く、濃くして味あり、水を飲まずして自ら渇を忘る

如何なる重態の肺病と雖も、之を呼吸すること三日ならば即ち根治せん。

欅の老樹の、大にして且つ奇に

盆栽に於ける絶品を其儘にして、萬倍に膨大せしめたるが如き

を見しは、那須温泉場より、元湯及び殺生石に赴くの通路に於て也、鎌倉光明寺本堂の前庭に於ける眞栢の老樹も、其姿勢の雄健奇拔な

して且つ古朴に、而も一枝の無駄を見出だし得ざること

亦是れ千金の盆栽を數千倍に膨大したるものにして、共に、千萬回見ても飽くを知らざる喬木美也、

依つて思ふに、盆栽なるものは、瓦盆に擒にされたる數寸乃至尺餘の矮樹をして、丘壑に偃蹇する老木大樹の雄姿を縮寫せしめ、之に對すれば、人をして自然界の偉觀を聯想して塵俗を離るゝの思ひあらしむるを以て、其存在の價値となさゞるべからず、此意を以て盆栽を愛玩する者あらば、予と雖も其俗惡を笑はざるべし、されど、盆栽を愛玩する者の多くは、其木の矮小なるを、愛玩すべき價値を成す所の最も重要なる資格と認むるにて、眼前それと同型なる大樹の存在を見るとも、何の注意を拂ふ無し、是れ予が、彼等の俗惡卑小笑ふに堪へたりとなす所以也、故に曰く

自然の大樹と盆栽の矮樹と相似たる場合には、大樹が矮樹に似たるを以て價値ありとなすにあらずして、矮樹が大樹に似たるを以て價値ありとなすべしと、之に依つて大樹の雄姿を聯想せしむる外、盆栽の矮樹に何等獨立せる存在の意義あらんや。

全鎌倉を歴する樹王

鎌倉八幡宮の石段脇に立てる大銀杏樹は、流石に全鎌倉を歴する樹木の王にて、之を伐らば斧を刎ね返さんと思はるゝ程に老硬也、されど、古老の言に依れば、是れ

公曉を其後に潛ましめし銀杏樹の二代目

なりと云ふ、古歌に曰く

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

と、之を思ふて黙黙として魂を銷す。

榕樹と新日本的風景

嘗つて臺北に在り、小滊船に依りて淡水港に遊ぶ、崖を負ひ水を壓して、榕樹の巨大なるもの數株あり、枝垂れて地に入るもの無數、皆本幹の周圍に支柱を繞らし、形狀甚だ怪奇也、而して、之に朝顔の如く蕚顔に似たる蔓からみて花を着くるあり、更に點檢すれば、

樹上突兀として、數世紀以前より存在せる歐羅巴式高塔の聳ゆるを見る、全然內地と異なりて而も甚だ眼に快き

新日本的風景を領し得たる

は、主として榕樹の賜也。

北見を旅行して、杖苫內に近き山路を過ぎたる時に領せし老木大樹の風景は、極めて予に新奇なるものなりき、大古以來の北海道的森林が、莽々蒼々として海を壓しつゝある光景は、得も云はれず雄渾なるものにて、「トゞ」及び蝦夷松は鬱々と天を刺し、板谷楓及び「ガビ」は鬱々として地を蔽ひ、佶倔たる樹、蕭疎たる山漆、北海道的森林の趣致と風姿とはこゝに兼ね備はれり、加ふるに、路は、莖の高さ八九尺にして葉の長さ二尺餘なる虎杖（いたどり）と、人身を包むべき欵冬とに埋められて、歩みを進むれば、虎杖の葉隱れに啼く鶯を驚き起たしむ、時方に七月中旬也、然るに、樹木一際茂り合ひて、小暗きばかりなる所に

牡丹よりなほ數倍大にして紅なる花が、四つ五つ枝頭より垂るゝを見附

けたれば、北見にては、珍らしき花が夏咲くものよと、日本以外の地に來りたる如き心地となり、一枝折らまく近寄り見たるに、何ぞ測らん、是れ、山漆の葉の所々紅葉したるものならんとは、如何に所變ればとて、七月中旬の紅葉には實に驚き入りたり。

予は、多くの場合に於て老杉の純林を愛す、其高さ二十丈に近くして其數幾萬なるを知らず、黑凜々として谷を埋め山を呑み、其頭よりは雲を吐き、其根よりは水を吹き、唯だ溪流の蛇の如く白きありて、其外、盡もなほ夜の如くなるの光景に接しつゝ、腦を冷やし骨を洗ふは、予の最も幸福とする所也。

最も木曾山中を愛す、紺紫の霧を固めたるが如き深林より、杉の精髓を搾り集めたるかと思はるゝばかりの清流を吐き出だすに、伐り倒されたる杉の巨木は、筏に編まれて却つて其上を辷り來る也、

木曾的趣味

杉の深林の夜

幽寂の氣凝り成して魑魅を生せんとするの所、忽ち丁々たる伐木の聲を聞く、既にして伐木の聲止めば、朗々たる清音を放ちて

木曾のなァ、木曾の御嶽山は夏でも寒い、ナンヂヤラホイ、拾やりたや、中乘さん、足袋添へて、ヨイ〳〵〳〵

と唄ふ者あり、萬樹の老杉皆感に堪へたる呻きを帶びつゝ之を聞く、實に是れ木曾的趣味の絶頂也。

嘗つて、羽後の眞山本山に遊びき、眞山及び本山は、兩頭に向つて各別に與へられたる名にして、元來一坐の山也、雄鹿半島の頂部にして、一面無數の巖石を海に向つて走らせ、以て有名なる雄鹿の奇景をなし、而して、他の一面、島の內部に向へる所は、數千尺の頂上より深々たる谷底に至る迄、盡く杉の純林を以て蔽はる、眞黑々の大塊物が、今にもユラリ〳〵と搖るぎ出ださんばかりの有樣、心地好くも亦物凄く、之に對すれば、豪大奇烈の氣勃々として動いて已まざる也、山下に孤村あり、安全寺と云ふ、予、此所に在る森林管守に招がれて到り、一夜其居に宿せしことあり、時恰も盛夏、兩人對坐して酒を行るに、陰森として風も無きに

針の如き鋒鋩を含める冷氣ありて襲ひ到り、屢々ラムプの火を豆の如くに縮ましむ

る也、杜甫の詩に

山鬼吹灯滅

とは、これを強く形容したるものなるべし、既に寢ねて曉に近づけば、夢慨いて寒きを覺ゆ、窓を推すに、雲霧變幻の間、老杉皆黑鬼の如く、中に「マオー、マオー」と、人を嚇す如き聲にて鳴く鳥あり、予をして是れ人界なりやと疑はしむ、御風の句に

夏霧や魔王呼び出す鳥は何

とあるは此鳥なりと。

少數の杉の美

以上二項は、杉の深林に就いて感受せし喬木美を側面的に述べたるものなるが、杉の美は獨り其多數の集合にあるのみにあらずして、

俗に云ふ「野中の一本杉」も亦甚だ趣致あるもの也、但し、一本杉と云ふも、必ず其數を一本に限るべきにあらずして、二本三本なるも亦風景上一本杉と齊しく見るを得るの場合あるべし、小祠を謎し、古塚に傍ひ、流水に臨み、池沼に接し、若しくは何も無き曠野に立つ、注連を張られたると張られざると、空洞あると無きと、すべて皆趣致あり、但し、すべて皆天を衝くの老樹ならざるべからずとなす、予嘗つて富士山に登りての歸途、太郎坊と御殿場の中間なる瀧河原に滯留して、裾野の趣味に耽くること三日に及びき、其時甚深に頭腦に印象せられたるは、見渡す限り老木大樹の目を遮る無き間、唯だ、近傍なる山王臺の一側面に、荒れ果てたる小祠を圍みて、數百年の老杉の肉硬く骨秀でたるが、數樹枝葉を交へつゝあるそれ也、最も大なる一樹を撫して立てば、何と無く、裾野の樹木は皆寶永の大噴火後に生じたるものにて、此所の老杉のみ、獨り其噴火以前より存在し、熱灰熱礫を猛雨急霰と降らしゝ噴火作用とも鬪ひて、遂に之

に打勝ち、以て其生の誇りを示しつゝあるものにあらずやと思はるゝ也、之を仰ぐに、强盛なる男性的意氣の我を壓倒するを覺ゆ、是等の杉は、富士の大をも認めずして、丘の側面に身を背けつゝ、强ねたる彳みをなすものにあらずや、鐵腕鐵脚とは此杉の强さ硬さにあらずやと、自ら我に語りつゝ、更に、之に沿へる小川を隔てゝ、眉刷毛の如き花を着けたる合觀樹の、悄乎として水を臨めるを、女性的の極致と觀ずるや、予は端無く

若し男子ならば、一双の鐵腕ありて、地球の南極より北極迄を、盡く打破し了るべく、若し女子ならば、兩片の朱唇ありて、地球の南極より北極迄を、盡く接吻し了るべし

とのバイロンの言を想起せざる能はざりき、而して後、山王臺に上りて、一笑して富士に對す、此間の情懷人の悟るを許さゞる也。

未だ松に就いて云はざりき、されど、是れ松に重きを置かざるが故にあらず、松は日本の風景の基本にして、日本てふ國は、松を以

播州海岸と名松

て、周圍を取捲きて、其中に櫻の見ゆる國なりと云はゝ足りなん如く、極めて重要なるものなると共に、又極めて普遍なるものなれば、取り立てゝ之を云はぬは、却つて云ふが上に重きを置くの故と知るべし。

流石に松の日本なれば、全國到る所に所謂名松なるものあり、就中、播州の海岸を以て最も名松に富める區域となす、「高砂の松」「尾上の松」「別府の松」「曾根の松」等是れ也、皆、長サ五六間に過ぎずして、横に延ぶること十數間乃至二十間に及ぶものなるが、榜を立て垣を繞らして其神聖を護せり、而も、是れ共に古への物にあらずして、謠曲に入り、若しくは始めて植えられしそれよりは、數代を經たる子孫なりと云ふ、但し、之に對して予躍の起す感想は、よくも珍らしく横に枝を延ばしたるものと思ふのみにて、風景としての美感を催さゝる上、却つて、風景と隔絶したる囚はれの物として過するの意を生ずる也、尤も、日本の風景を組織する重要素たる松の見

風景としての松

名も無き山野の名も無き松を愛す

本が、是等の所に展覽せられつゝあるものと思へば、遺憾を感ずること無しと雖も

風景としては、囚はれたる名松よりは、囚はれざる無名の松を却つて優れりとなす

也、すべて、極端は却つて他の一方の極端に近きが故に、松は脱俗の極なるものなると共に、亦、喬木中最も人手に掛りて俗惡化せしめられ易きものたるを免れず、此點のみは實に遺憾也、故に予は、名所の名松を愛せずして、却つて、名も無き山野の名も無き松が、心の儘自然に成長して老大に至りたる、矯々たる虬龍の姿を愛す

山里は松の音のみ聞き慣れて風吹かぬ日は淋しかりけり

の其松を愛す

君と別れて松原行けば松の露やら涙やら

の其松を愛す、松蕈採る山の松を愛す、松露採る野の松を愛す、其高く上がりたる根に腰打掛くべき巖の松を愛す、其廣く蔽へる陰に

腹道ふべき砂の松を愛す、而も、斯る松は全國到る所に之を見るべきのみならず、日本の風景を成すものも亦斯る松にてある也。

之を喬木美論の結末となす。

◎櫻花國と梅花國

其一　日本には何故に梅多きや

日本の櫻花國なること云ふ迄も無し、而も、日本に於て特に櫻花の進化し、日本に於て特に櫻花の好愛せらるゝ所以は、既に哲學的且つ科學的に之を概說せり、今更、日本の果して櫻花國なるか否かを疑ふべき餘蘊は無き也、されど予は

既に日本の櫻花國なるを確定したる上、更に之を呼んで梅花國となさん

とす。

それ梅花は、其固く閉ぢたる唇を以て、先づ春無きの時に出で、而も、春を他に求むるにあらず、自ら唇を開いて春を吐く、こゝに於て天地始めて眞に春也、見よ、日本に於て如何に梅樹の多きかを、

梅花國的趣味

櫻花國と梅花國との程度

水村、山郭、都市、海驛、所として梅ならざるは無く、未だ枯黄の冬衣を脱せざる天地に、先づ己れ自身の春を發する也、一樹の梅あり、數樹の梅あり、十百千萬樹の梅あり、路傍の梅あり、籬落の梅あり、梅園の梅あり、梅林の梅あり、梅溪の梅あり

梅咲くや乞食の家も覗かるゝ

の梅あり、櫻花の如く、綠なるものを殘せる外、全日本を一白ならしむるの、目覺ましさ華やかさは無くして

櫻花國と云ふべく櫻花が全日本をそれ自身化する程高度ならず

と雖も、其點々たる香玉を綴りて、全日本に霞を散ずるの一期には、確に

日本が一種の梅花國的趣味に化せらるゝ

也、固より

梅花が日本を梅花國化する作用の高度と濃度とは、櫻花が爾かするに劣ること

日本に梅多き理由

を知る、されど、其一期に

呼んで梅花國となす

も亦差支無かるべし。

扨て、進んで、日本には何故に爾く梅多きやとの問題に入らん、曰く

日本に梅多きは日本人が梅干を嗜むに由れり

即ち、日本人の多數が梅干を需用するを以て、其原料を供給するの梅樹は多く植えられ、隨つて、到る所其花を見る也、妥當に云へば

元來梅は、花を主産物として實を副産物とせらるゝにあらず、實を主産物として花を副産物とせらるゝ

也、花を看るべき木として植えらるゝ傍ら、實を採るべき木とせらるゝにあらず、實を採るべき木として植えらるゝ傍ら、花を看るべき木とせらるゝ也、尤も、人に依つては、全然梅を花の木として遇し、且つ之を養ふ者無きにあらずと雖も

一般多數が、梅を以て實用の木となす

は、爭ふべからざる事實也、日本に於ける梅樹の總數幾千萬なるやを知らずと雖も、其三分の二は實用を主として植えられたるものなるべし。

されば、櫻が何の實用的意義を帶ばずして盛に栽培せらるゝより

は、梅の栽培せらるゝ意義一段劣れりとなすべく

日本を櫻花國と呼ぶ聲の清めるに比べて、之を梅花國と呼ぶのやゝ濁れる

も是非無しと云ふべし、但し、其花の監賞にされ、其幹の版木に用ひらるゝを以て、櫻も亦實用的意義を帶ぶるの樹木なりと云ふことを許さず。

其二　梅花と國民の氣質

されど、吾人は斷じて梅を實用の木と見ず、梅干など、平生人間

の食ふべきものに數へ置かざる也。

酸味ありて人を身震ひせしむる實を結ぶの木、赤く圓くして酸く鹹き物を朝の食膳に供する木たることを、暫く忘れ去りて、單に花の木として梅に對する時は、其

冬の胴中を突き破りて春を注ぎ込む如き尖新の氣

先づ人を活かすに足り、其枝の勁きこと、春を撻ち起す鐵鞭かと思はるゝ、其蕾の固きこと、春をコンデンスしたる玉に似たる、其蕾の破るゝや、中より春の飛躍し出づるを見るべきが如くなる、其花の形狀色相の緊張を表し充實を現し與奮を示して、常に沸々とてし香氣を發射する、其靜止の底不斷の活動を藏して、竟に肥ゆるの暇無きが如くなる、梅は獨り、冬の胴中を突き破りて春を注ぎ込むのみならず、亦

春を鋭き針となして人の頭腦を貫穿

するもの也。

啓蒙的、開發的、革命的なる梅花

世界に無き所

此の如く、梅花は、警醒的、開發的、革命的なるものにして
春を揮つて自然と人とを警醒し、春を揮つて自然と人とを開發し、春を揮つて自然と人とに革命を與ふる
ものなれば、其花は又國民の氣質と關係ある也、直截に云へば、國民をして精神に彈力を滿たしめて、自ら新たにし自ら進むに鋭からしむるもの也、此點に於て、日本に梅多きは喜ぶべき事實也、梅は、櫻が日本特有の物なるに似ずして、支那にもあり、歐米諸國にもあり、殊に、支那に於ては梅を尙んで百花の上位に置くと雖も、未だ日本が實用的に其木を植えて、其一期の全國を香世界となす如くなるに至らず、就中、十數里の間山も谷も盡く梅なる、大和の月ケ瀬地方に至りては、世界の何れの所にも之に似たるものを求むることを能はず、梅にあらざる他の花にてさへ、此の如く廣き範圍に連なれるものは世界に無き也、而も、此の如く日本に梅多き主なる理由は、梅干を食らふ習慣の普遍なるが故にして

外國人が梅干を食ふ習慣は、日本人の如く梅干を食らふ習慣が他國人の間に遷移せざる間は、何時迄も日本は梅花國たるの地位を失はざる也

春を待つてふ語の意義

べき也。

其三　梅花の趣致

之を待つの情に云ふべからざる趣きあるもの、梅花に過ぐるは無し。

春を待つてふ語には、普通の意味以外云ふべからざる情趣あり、此語を通じて眼中に描かるゝ光景は、横斜の枝に帶紅乳白の珠を綴れる、梅の蕾のそれにして

春を待つは即ち梅を待つ

也、春を待つてふ語の底を探れば、手に觸るゝものは即ち梅の蕾也、梅の蕾は實際極めて冷たきものにして、春を待つ心に甚だ暖かく想像せらる。

探つて見出だすべき花

而も、梅の趣は蕾最も好し、次には半開を愛す、石を抱ける老樹皆蕾にして、中に半開の花を交ふること僅に一二輪、此所正に梅の本色也。

探梅てふ語あり、梅を待ち得て蕾の一點を見出だしたる時より、此語は強き脈搏を帶び來る也、爾り

梅は探つて見出だすべき花

也、故に、梅園は果實を採るべき場所にして、往いて看るべき場所にあらず、梅園を開いて花時に客を招ぐは商賣也、咎むべからず、されど、招かれて往くは俗物也、哂ふべし。

梅を探るべく、瓢を手にするも好し、握飯を腰にするも宜し、大福餅を懷にするも可也、亦何も携へぬも結構也、野橋のほとりの店に駄菓子を嚙み、小百姓の井戸に釣瓶移しの水を飲む、水邊、籬落、祠前、寺後、隨所に梅ありて隨所に趣あり、斯くして、偶然商賣的梅園の前に至らば、たゞ籬を繞つて外邊より之を望むべく、或は隙

間より之を覗くべし、一たび内に入らば則ち興趣盡きん、若し夫れ

馬上に人家の梅を折るに至つては、領し得て梅花の趣致の頂上なりとなす。

梅を植ゆること、僅に一樹なるべし、已むを得ずんば二樹三樹を許すと雖も、三樹以上は斷じて不可也、強ゐて三樹以上を植えんとを欲せば、宜しく百千樹ならしめて商賣となすべき也。

一村皆梅、數村盡く梅、梅の中に村あり、梅の中に路あり、梅の中に川あり、梅の中にて人生れ、梅の中にて人死す、これならば、梅園とも亦殊なりて好し、大和の月ヶ瀬地方の如き即ち是れ也、但し、かゝる土地に遊び、かゝる土地を過ぐる時には

成るべく寺院に頼みて泊るを可とす

る也、空寂たる禪房の獨宿にあらずんば、其日一日看盡くしゝ梅が、正當に夢に入り來らざるべし、かゝる土地に到りて眞の得る所は、其日の現實にあらで其夜の夢幻に在りとなす。

これは、或る山寺に宿かりし時の事也、佛殿の古びたるに壁畫のいみじきあり、日暮れたれど、僧の紙燭を乘つて導くまゝ、楹側傳ひに到り見れば、早や大半剝げ落ちて、蠟燭の弱き光力にては、定かに認め得ず、されど、模糊たる中に云ふべからざる趣致ありて、覺えず恍然となりたる所、忽然庭の一方より冷たき風來て、手にて打つ如く紙燭を消しぬ、呀ッと驚いて風の來る方に面を向くれば

暗中唯だ水の如き梅氣あり、我が血肉を透して、壁畫にも沁み渡るならん

と思はる、梅花の趣致も此に至れば、人と共に語ること能はざるの域也。

嘗つて杉田に到りて、梅の花の鹽漬を湯に點じたるを喫し、櫻の花のそれに優るを覺えき、五十三次を草鞋にて旅したる時、戸塚に折り得たる梅の花を、藤澤の畫飯の刺身に加へて餐す、其妙味今も忘るゝこと能はず、依つて知る

梅花は目にて見るべきものにあらずして鼻にて嗅ぐべきものなるを、鼻にて嗅ぐべきものにあらずして、齒にて嚙むべきものなるを、齒にて嚙むべきものにあらずして、舌にて味ふべきものなるを

予は露骨に梅花の味ひを知り得たりと敢て云ふ。

盆栽の梅亦絶對に排斥すべからず、たゞ其滿開の時に至らば、遠ざけて坐側に在らしむべからず、天下、盆栽の梅の滿開せる程目も當てられぬざまなるは無ければ也。

梅に鶯、梅に鶴、皆不調和也、最も好きは紙鳶のウナリ也。其紙鳶の落ち來りて梅の枝に引ッ掛りたる更に妙也、引掛りて惜しき程花を散らしたる更に〳〵妙也、而して終に絲の切れたるを可なりとなす、其紙鳶は小さからずして、彩色の武者繪なるが宜し、蠟て、紙鳶と上下して月も懸かるべし。

月夜に白梅を看る、他奇ある無し、紅梅こそ月下に眺めて面白き

ものなれ、眞個に淡墨の畫の如く見ゆるは月下の紅梅也、されど、紙窓の掛かるは白梅が好し。

予が領せし梅花の趣味、ザットこんなもの也。

◎潮流の變調と日本の風景

其一　風景の變化する場合

未だ、地理學者及び其他の學者の所說を聞かずと雖も、予を以て之を見れば、風景を破壞する作用普通に二あり。

其一　自然的破壞作用

其二　人爲的破壞作用

是れ也、而して又、之に對して風景を建設する作用も亦普通に二あり。

其一　自然的建設作用

其二　人爲的建設作用

是れ也、先づ破壞作用によりして解說せんに、其自然的に屬するも

のは、噴火、地震、海嘯、暴風雨、洪水、土地の陷落及び隆起、其崩壊、湖沼の涸渇、塡充、堆積、樹木の枯死等を主となし、其人爲的に屬するものは、新道の開鑿、鐵道の敷設、山野の開墾、山林其他老木大樹の亂伐、都會及び村落の膨脹發達、工場の設置、煤煙等是れ也、又、建設作用に於て自然的に屬するものを見るに、草木蘚苔の發生及び繁茂、之に伴ふ流水の增量及び其澄清、風蝕雨蝕、流水及び海水の浸蝕と打擊、流水の運搬作用及び建設作用に成る河口の三角洲、風及び鳥獸に爲さるゝ草木の種子の移植等の外、噴火、地震、海嘯、暴風雨、洪水、土地の陷落及び隆起、其崩壊等、尋常にては風景を破壞すべき作用が、或度に至らず、若しくは或度を過ぐることに依つて、却つて風景を建設することあり、而して、其人爲的に屬するものも、山林及び花樹果木其他種々の植物の養成、河川及び湖沼の浚渫、橋梁の架設、社寺堂塔樓臺亭榭の建築等を擧ぐべきのみならず、亦、新道の開鑿、山野の開墾、都會及び村落の膨

風景をして變化せしむる四作用

脹發達等の破壞作用が、反對に風景の建設を助くることあるを知らざるべからず。

而も、此建設破壞に於ける四種の作用は、各單獨に結果を成すにあらずして

大抵四種の作用同時に結果し、たゞ其度に高低强弱あるのみなるを見る、斯くて、風景は一般に常住のものにあらずして好くか惡くか、多くか少なくか、兎に角、斷えず變化を與へられつゝある也。

試みに、日本に於ての二三の例を擧げんに、富士山は噴火の爲めに海灣中に隆起したるものなりと云へば、之に依つて、自然的風景建設作用としての噴火を窺ふべく、又、寶永山、小富士、小御嶽等の寄生火山の爲めに形狀を損じられたれば、之を以て、自然的風景破壞作用としての噴火の例となすべし、而も、富士山は土地の隆起

特に日本に於たる風景變化の作用

に依つて建設せられたる風景なりと雖も、他には、土地の隆起の爲めに風景を破壞せられたる象潟の例あり、なほ、同じく新道の開鑿なりと雖も、駿州薩陀峠の風景は之が爲めに失はれ、甲州御嶽は之が爲めに却つて新たなる風景を得たり、其他煤煙の如きは、獨り、其空に飜りたる外觀の美ならざるのみならず、草木を變色せしめ、終に之を枯死せしむるに至る迄、甚だしく風景を破壞するものなりと雖も、亦其夕暮の一時に於て、空氣中に浮遊せる微細の黑片に日光を吸收し、以て都府の暮色を濃き紫となし、之に映するもの、木も水も、家も、人も、車も、馬も、道路も、橋梁も、皆紫を帶ばざる無きに至らしむる、以て、風景を建設するものとなさゞるを得ざるにあらずとなす。

此の如く、風景は種々の複雜なる作用に依り、常に變化を與へられつゝあるものにて、世界何れの所に見るも其理は同じきが、こゝに

潮流變動の事實

特に新たに日本のみに起りたる、著大なる風景變化の作用あり、乞ふ之を述べん。

其二　日本に於ける潮流の移動

暫く風景上の問題を預り置きて、先づ或る事實を事實の儘に述べん。

近頃（即ち明治四十三年一月頃）、宮城縣水產試驗場の實測に據れば、從來其地方の近海の水溫は、此時期に於て、平均十四五度ぐらゐのものなりしに、本年は例に異なりて三四度昇り、十八九度の位置を保ちつゝあり、是れ南方より來れる暖潮が、從來の流域を移動して陸地に接近したる結果なるべく、其地方に於て冬季の漁獲を見ざりし鰹、鰮の如きの、引網と釣とに上りつゝあるに依るも、其地方一體の氣候が例年に

比し四五度以上の温暖を示しつゝあるに依るも、敢て疑ひを容れざる事實にして、若し是れ一時的現象にあらず、將來永續すべきものとすれば、陸上の農作物等にも亦少なからざる影響を與ふべしと云ふ。

新聞紙は、此報告を讀者に紹介するに當りて、之に專門學者の意見を附加せり。

其中、水産學者たる理學博士岸上錄吉氏の言に曰く、果して此の如き事實ありとせば

是れ確に海流の變調

也、實際其地方の近海の水温は、冬期に於て十四五度或は其以下に降るを常となすに、之が十八九度に昇れるを見るは、確に是れ一大變調也、殊に、其地方の近海に於て引續き鰹の漁獲ありとは、實に未曾有の事となすべし、鰹は十八九度乃至二十度の水温を保てる海ならでは、決して居らざるものなれば、是れ何よりも明らかなる證據也、而して、之と思ひ合はすべき事實は、昨年五月頃、津輕海峽の太平洋側、即ち、陸奥國大間岬と尻矢岬との間に於て、例に無く産卵鯡の群來を見たり、思ひも寄らざる事なれば、漁夫に其準備無くして多數の漁獲をなすこと能はざるを遺憾となしゝが、若し今年も亦昨年の如くならば、大に其用意に及ばざるべからずと云ひつゝあり、是れ、古へより未だ曾つて有らざりし所也、又、昨年十二月より今年一月に連りての事、北海道の根室地方にて夥しき鯡の漁獲ありき、此地方に於ける此時期の斯る事實は、從來未だ曾つて有らざりし所にして、是亦非常の異例となすべし、なほ、他の一例は數年を隔てたる事にして、三十九年の冬期と記憶す、房州勝浦附近に於て俄に寒流（親潮）の陸地に近く移動し來るを見、之が爲めに、大小無數の魚類の凍死して海岸に打上げらるゝあり、近傍の住民に思ひ設けぬ利得を與へたりと云へり、而も、此房州に於ける事實は僅に二三日に止まりて後、平常に復したれば、單に之を一時の變調

とのみ見るべしと雖も、今回の東北に於ける變調は昨年より引續きたる作用にして、恐らくは一時的現象と認むべきにあらざるべく、大に研究を要する問題ならん、されど、之を研究せんには、今一段精細の報告を得ざるべからず、例へば、從來此時期に於て漁獲なかりし鰹が、今年に限りて漁獲せられたりとせば、其何れの邊に於てなるか、又、其幾何なるか、即ち、漁獲場所及び漁獲數等を細知したし、同時に、鰹、鰯の外、或る珍らしき魚類は漁獲せられざりしか、或は、從來漁獲せられしものにして、近頃網にも鈎にも上らざるに至りたるものはあらざるか、若し、從來のものが漁獲せられざるに至りて、代りに鰹等が新たに漁獲せらるゝに至りたりとすれば

是れ確に暖流が寒流を驅逐したる徵

也、萬一從來のものは其儘に漁獲せられつゝ、而も同時に鰹等が漁獲せらるとすれば、是れ實に不可思議なる現象にて、更に興味ある研究問題なりとなす、故に、斯る材料を成るべく多く各沿海地方より集めて、之を比較研究なしたる上、愈々潮流の移動せるや否やを確定し得べく、果して潮流が位置を換へたりとすれば、縱令之を一地方の事となしても、第一

氣候に一大變化

を來し、是迄の航路には無かりし筈の暗礁等が、潮流の移動に心附かずして通行する船舶に危害を加ふることもあるべく、漁業に大關係あるは勿論、其他、農作物の種蒔、植附より、一般農業上にも亦少なからざる影響を及ぼすべく、實に容易ならざる大事變と云はざるを得ずと。

又、湖沼學及び海洋學に造詣深しと稱せらるゝ子爵田中和歌麿氏の言に云ふ、潮流の移動は、東北地方が最も著るしと雖も、是れ

獨り東北地方のみに限れる事實にあらざる

を知り得たり、先づ、東北方面の潮流の移動し來れる事實を述べんに、太平洋側にては、從來銚子沖より方向を轉じて、殆んど全く東

潮流の變動と氣候の變化

潮流は東北地方のみに限れる事實にあらず

方に向ひつゝ米國方面に去りし暖流（黒潮）が、近頃に至りては、銚子沖より尙ほ陸地に並行して北に進み、北海道の東海岸に達する所迄行きて、始めて米國方面に向ふべく變動せり、又、日本海側に於ても、對馬海峽を通過して、本州に傍ひつゝ北に行く所の暖流が、近來は著るしく北方に進み、樺太の西海岸にても、なほ明らかに黒潮の流を認むべきに至れり、即ち

東北地方は暖流に兩岸より接近せられて、漸次に暖かになり來れる次第にて、北海道及び樺太の一部も亦之と傾向を同うせる

也、是れ、暖流の力加はりて寒流を驅逐したる爲めか、若しくは、寒潮の力減じて暖流したるが故か、二つの中其何れか一なるに相違無し、而も、潮流の移動は獨り東北方面にのみ限れるにあらずして、伊豆七島、三宅島あたりにも其變調を認むべく、なほ遙に南方に於て見るも、前には沖合より紀州潮岬邊に至る迄南に向つて通せし暖流が、此頃にては、たゞ沖合の方が前の儘なるのみにて、陸近く南に流れしものは失せ、代りに北に向つて流るゝものを生せり、乃ち知る

東北方面の潮流の移動は、日本を繞れる總體の海水に於ける潮流に變調を來したる結果

なることを、但し、此變調は何の時より始まりしかを知らずと雖も、近來特に著るしくなり來れるは、疑ふべからざる事實也、然らば、何に據つて之を知るか、曰く、其一は、漁場の位置、漁獲の種類、漁業の時期等の變化、即ち、暖なる水に棲む所の鮪、鰹等が、是迄無かりし北方の海に於て、時ならざるに漁獲せられ、又、秋刀魚の如きは、暖流と寒潮との中間に棲むものなるに、これも北方に於て漁獲せらるゝに至れる等の事實にして、他の一は、潮流を利用して航路となす所の帆船が、近來屢々海圖と異なれる潮流の方向と速度とに餘儀無くせらるゝの事實あるより、是等を基礎となして漸次に研究を積みたるにて、明確なる實驗上の結果也、なほ、今一段廣大

なる範圍より之を見るときは

此潮流の變調は、獨り日本の周圍のみに止まらずして、或は世界的一大變調なるやも知れず、過日の佛國巴里の大洪水とも關係無しと云ふべからざる

が如し、前例を擧ぐれば、十四五年前予が佛蘭に在る時の冬なりき、歐羅巴は例に無き寒氣にて、東洋通ひの船舶が出入する白耳義のアルヴェルス港などは、全部凍結して氷上を步行すべく、又、ブルッセル市の毎年一月より二月に掛けての氣候は、一度三四日間氷點以下に降れば、其次は漸次に溫暖に向ふ前例なるに、此年に限りて、冬期約一ヶ月半ばかりは、連續して氷點以下の氣候なりしが、不思議にも、此年の日本は、歐羅巴と反對にて、例に無き暖氣なりとの報に接したるより、是れ必ず

全世界の潮流に一大變調起りて、暖流日本に近づき、歐羅巴にては、米國より來りて近海を流るゝ暖流、即ち灣流が、方向を變じてグリーンランドを指し去りたる

に由れるなるべしと推測せり、今年も之と同じく

日本の冬は暖かにして、歐羅巴の冬は寒く

巴里に於ける稀有の洪水も此異常の寒氣が原因なれば、畢竟、日本近海の潮流の移動は、其全世界の變調の餘波と認むべきものなるべしと。

同氏又曰く、東北地方近海の潮流移動の爲め、其氣候に變化を及ぼし、前例は、先年の

東北大飢饉

に之を見るべし、東北大飢饉が潮流の移動の爲め氣候に變化を生じたる結果なりし事は、當時盛岡農林學校長たりし農學博士玉利喜造氏が研究として發表せられ、有名なる學界の話材となれり、此の如く、潮流の移動は獨り漁業上及び航海上のみにあらず、亦農業上にも非常の大影響を及ぼす也、加之、先年天下を驚かしたる

三陸の大海嘯

も亦潮流の變調の影響と認むべく、學界の所說は定められたりと。

以上は、事實を事實と見つゝ、實際上の利害を主題となせる議論なるが、果して、潮流の移動の影響は漁業上、航海上、及び農業上に見るべきのみにして、他の方面に其影響はあらざる歟、否、大にあり、乞ふ、予をして之を分說すべく、先づ左の一表を作らしめよ。

潮流の移動
- 漁業
- 航海
- 農業
- 氣候
  - 住民の氣風
  - 風景

即ち、潮流の移動より來る直接の影響は、漁業と航海と氣候とにて、農業上の影響は寧ろ其間接に屬するもの也、而も、間接に屬するものは、農業の外、其地方の住民の氣風に及ぼす影響と風景に及ぼすのそれとを、重なるものとして擧ぐることを得べし、此、農業の外なる間接の二影響は、亦決して輕視すべきものにあらざるに也、但し、氣候の變化が其地方の住民の氣風に及ぼす影響は、本書の問題外なれば、措いて之を論せずと雖も、潮流の移動と風景との關係に就いては、いさゝか言を費さゞるを得ず。

學者は潮流の移動が氣候に及ぼす影響を問題とせざるの狀あるは、怪しむべきの至り

其三　潮流の移動と風景との關係

潮流の移動は氣候に影響を及ぼし、氣候の變化は更に風景に影響を及ぼす也。

氣候の變化に伴ふの風景の變化

何故に爾るか、曰く、氣候若し變化して以前より寒冷とならば、第一、草木の發芽遲く其凋落早くなりて、荒凉たる風景を呈する期間の長き、第二、草木繁茂の力減じて其色亦薄きを致し、比較的貧寒の相を呈する、第三、以前に盛なりし或種の草木が衰へて、以前に微なりし或種の草木が榮ふる、第四、水蒸氣稀薄となりて風景の

潤澤を減ずる、第五、家屋及び人間の外裝防寒的となりて、風景に黯淡の趣を添ふる等、其他擧ぐべきもの少なからずと雖も、要するに。

風景より明麗の度を減じて、代りに黯慘の度を加ふる

也、之に反して、氣候若し變化して以前より温暖とならば、之に伴ふ風景の變化も、亦其寒冷となる場合と反對に、第一、草木の發芽早く其凋落遲くなりて、潤澤なる風景を呈する期間の長き、第二、草木繁茂の力加はりて其色亦濃きを致し、比較的豊富の相を呈する、第三、以前に微なりし或種の草木が榮へて、以前に盛なりし或種の草木が衰ふる、第四、水蒸氣濃厚となりて風景の潤澤を加ふる、第五、家屋及び人間の外裝の防寒的なるを撤して、風景に明麗の趣を添ふる等の現象を見るべしとなす、即ち

風景より黯慘の度を減じて、代りに明麗の度を加ふる

也、斯くて、近頃に於ける海水の變調が

東北地方の風景はすべし變化

太平洋側よりも日本海側よりも暖流を陸地に接近せしめ、其結果東北地方を温暖ならしむること四五度なるに至り、而も是れ一時的現象にあらずして、將來繼續すべきもの

とすれば、隨つて

東北地方の風景の變化すべきは勿論

にして、是れ、漁業上、航海上、農業上等に與へらるゝ影響の外、實に

吾人の研究すべき重要なる問題

也、而も此風景上の影響は、細かに注意せば、今日に於ても其著るしき點を見出だすに難からざるべく、或は、東北沿岸の夕暮などに於て、今迄と異なれる空氣の色を見ることもあらんが、其總體の大なる變化を見んには、數年乃至十數年の星霜を閲し去らざるべからざるべし。

但し、風景が變化すと云ふ以上、當然、其好變化をなすか惡變化

惡變化か好變化か

をなすかとの問題に移らざるを得ざる次第なるが、幸にして

方面が東北地方なると、氣候の變化が寒冷より温暖に移ると

の二點は、相俟つて風景に好變化を與ふる也、若し夫れ、方面が東北地方にして、氣候の變化が寒冷より更に寒冷に赴くならば、之が爲めに風景は寧ろ惡變化を受くべく、又、氣候の變化が温暖に赴くにても、方面が東北地方にあらずして、四國九州の如き温暖なる地方ならば、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しの理にて、風景は寧ろ適度を失うて惡變化をなすとも、決して好變化をなすべき筈は無き也。

元來、本州も東北地方となりては、やゝ、日本の風景の價値なる明麗潤澤の特色を失ひて、荒凉慘澹たる朔天胡地の趣致を呈するを認むべきが、此地方にして若し太平洋日本海兩面より暖潮に接近せられ、氣候に四五度乃至六七度の温暖を加ふるに至らば、前に擧げたる第一より第五迄の變化を呈して、風景は多少とも必ず面目を改むべく、而も、地上海面おしなべて

何より先づ空氣の色の美化を認めらるゝに至るべし、斯くて

東北地方を蔽へる荒凉慘澹たる朔天胡地の趣は比較的渺らぎて、明麗潤澤なる本州中部及び中央以南の致を帶ぶべく

之を概括的に觀すれば

日本の風景は、潮流の爲めに一段其特色を加へたり

と云ひ得るに至るべき也。

◎日本の風景と國民性

其一　風景と氣風との關係の有無

予は、種々の方面より日本の風景の特色を說き、而して、其世界に於て優秀なる所以を論せり、敢て十分なりと云ひ得べからずとも、細かき穿鑿を別となしての大體の議論は、略ぼ以上にて了へたりとなす、されど、顧みれば、なほ研究すべき一題目を殘せり、所は何ぞ、曰く、日本の風景と國民性との關係是れ也。

日本の風景に如何なる特色を認むべきやと云ふに、以上論じ去り說き來りたる所を總括して、中に或る一致を求めたる結果

明麗潤澤にして溫雅和暢に、淡中に深味ありて味ふれども盡きざる

に在るを確め得たり、勿論、單に、明麗潤澤と云ひ、溫雅和暢と云ひ、淡中に深味ありと云ふが如き、抽象的なる言辭を以てしては、

讀者に日本の風景の概念を傳ふるに足らずと雖も、既にそれ等の何なるかを、實地に就て反復詳說したる上なれば、こゝに再び說明を繰返すの要は無かるべし。

扨て、此、明麗潤澤にして溫雅和暢に、淡中に深味ありて味ふれども盡きざる特色を有する、日本の風景が、果して國民性に如何なる感化を與へたるかを問ふに先だち、廣き意味に於て

本來、風景てふものは、其風景の中に生活しつゝある住民の氣風と、關係あるものなるや否や

の問題を決せざるべからざる也、乞ふ、例證に依つて之を研究せん。

其二　風景と氣風との關係の例證

支那人の氣風が、散漫なる中に自ら雄大の趣を含みて、其多數は兎に角、中には、頭拔けて善き者、頭拔けて惡しき者、頭拔けて傑き者、頭拔けて詰まらなき者等、其大小高下の程度が、日本人の到

底及ばざる數字を示すあるは、畢竟、其眼に映ずる所の自然が、雄大なる點に於ても、强烈なる點に於ても、又、散漫なる點に於ても、平凡なる點に於ても、すべて日本に見ること能はざる過度なるものなるを以て也、勿論、之を以て單に風景の感化にのみ歸すべからずして、寧ろ他に大なる理由あるを認めざるを得ずと雖も、風景の感化も亦確に其理由の小ならざる一なりとなす、支那人の詩篇を見るに

天門中斷楚江開、碧水東流到北回、兩岸青山相對出、孤帆一片日邊來

と云ひ、又

走馬西來欲到天、辭家見月兩回圓、今夜不知何所宿、平砂萬里絶人煙

と云ふが如き、到底日本人の道ひ得ざる所にして、强いて道はゞ匠氣を帶ぶるを免れざるべきもの也、而も、一たび支那人の手に成るを見れば、穩健にして毫も不自然なる點あるを覺えしめず、是れ其

實景實情なるを以て也。

なほ適切なる一例は

險夷元不滯胸中、何異浮雲過大空、夜靜海濤三萬里、月明飛錫下天風

と云ふ王陽明が有名なる詩を換骨奪胎して

玉山兀立刺青空、鐵鎖援雲摩月宮、晚嘲會仙壇畔雪、朗吟飛下北溟風

と歌ひたる日本の詩人あり、巧拙は別問題として、彼は自然的に是は人工的なるの差を見るべからずや。

即ち、支那の風景は支那人の氣風に感化を與へて、自然に日本人と異なれる聲を發せしむるに至りたる也。

又、予嘗つて印度の青年が英語もて自國の事を綴りたる小說を讀

譯せしことあり、中に旅人が山中を行くの一段あり、其數節をこゝに摘錄せんに

劍を並べたやうな岩山の、一歩を誤まれば底知れぬ谷底へ落込むべき險しい路を辿り行くに、堪へ難い暑さの爲めに彼の血は沸きかへり、果ては、心神惱亂して、我知らず地上に倒れ伏した、すると、山々一度に崩れかゝるかとばかりの恐ろしい物音に打たれたので、俄に己れに返り、惚りしてガバと飛び起きた、あたりを見廻はすと、こは如何に、赤く、黃に、黑く、紫に、火焰の如く、血煙の如くなる、一種の氣が、上を下へと混亂する中から、千萬の魔軍が現はれ出で、旗を飜し、戟を揮ひ、喊の聲を合はせて彼を取圍むのである、彼は、モウおれの生命は無いと叫びさま、再び崩れるやうに倒れ伏して、其儘息が絶えた。

とあり、之を見る人、誰れか地上に此の如き現象のあり得るを信せんや、されど、酷烈なる暑熱に攪亂せられて、一時變調を呈したる頭腦に、氣象の急激なる變動にて、俄に烈風起り亂雲湧くの光景が映じたるものと聞かば、亦、其實際の幾分を想像し得ざるにあらざるべし、實に、印度に於ける自然力の絶大に、自然力の作用を受けて異狀を呈する風景の、偉絶且つ怪絶なるは

其住民をして極端なる迷信を懷かしめ、同時に其想像力を無窮に發達せしむるに、與つて力ある所以

にして、印度が佛教を產し、又、其經典に描かれたる地獄及び極樂の光景の奇を極め怪を極むること、到底、日本人の頭及び手の企て能はざる所なるは、亦、其風景の偉絶怪絶なる度が、到底日本のそれの及ぶ能はざる所なるを以て也。

又、左手にコーランを捧げ、右手に劍を提げて、及の下に天國ありと叫びつゝ、血を以て其宗旨を廣むる所の回々教が、何れの所より生れたるかを問ひて

頑悠にして奇烈なる容貌を有せるマホメットが、陰欝にして荒涼なるアラビヤ砂漠の一隅に立ちつゝ、圏々たる紫黑の層雲の天より轉び落ちんとするが如くなるを仰ぎ、天地の光景の偉絶怪絶なるに打たれて、覺えず

アラー、アクバー（神は大也）

と絶叫したる、當初の事情を聞かば、是亦、或意味に於ては、日本に有り得ざる宗教が、日本に有り得ざる風景の感化に成りし氣風の中より醸し出だされたるものなるを知るべきにあらずや。

其他、風景と氣風との關係を窺ふべき例證は甚だ多しと雖も、以上の如きは其最も著るしき部分と認むることを得べき也。

其三　風景に感化されたる日本人の氣風

以上の例證に依りて、或地或國の風景と、其地其國の住民との間に、重大なる關係あるものなるを信ずることを得べしとすれば、次には、日本の風景、即ち明麗潤澤にして温雅和暢に、淡中に深味ありて味ふれども盡くること無きそれが、日本人の氣風と如何なる關係あるか、亦現に與へつゝあるかの問題に移らざるべからず。

云ふ迄も無く

日本人の氣風の、快活にして淡泊に、人々多少の詩想と美術心とを有して、其生活に雅致を帶ばしむることを好む

は、其風景の感化に由ること少なしとせず、同時に

日本人の性情の、或度以上に執着固定せずして、轉じ易く、移り易く、飽き易く、忘れ易きも

亦、其或點迄風景の感化に由れるにあらずとせざる也、即ち

日本の風景は、其國民性に好感化を與ふると共に、亦少なからざる惡感化を與へ

たり、更に進んで云へば

日本人に大事業無く、大發明無く、大哲學無く、大美術無く、大詩篇無く、大作物無く、大陰謀無く、大雄圖無く

して、徒らに小手先の鮮やかなるを能事とするが如き態あるも、亦其風景の惡感化にあらざるを知らざる也。

かの、面を數千尺の高地に置きて、底は大洋の最も深き所よりも低く、一たび風起れば、何れの海にも見るべからざる大濤洪浪を動かし、其堅氷丈餘の厚さを成して、氷上に鐵道を敷き汽車を走らしむべき度に至る時にても、なほ且つ氷下の激浪の打擊に餘儀無くされて、幅數尺、長さ一二哩に渡るの、所謂トロスなる龜裂を生じ、數十百の旅客を呑みて再び唇を結ぶの奇異なる現象を呈することある

世界の魔湖バイカルに、世界第一の怪雄にして、其侵略區域、亞細亞の殆んど全部と、歐羅巴の大部分とに渡り、空前絶後の恐慌を世界に與へたる成吉思汗が、始めて旗を上げたるの小島である

如き、眞に、史と地と相俟つて人を驚かすこと無上なる事實にあらずや、バイカル湖の怪と成吉思汗の奇との間、豈形而上の關係無しとすることを得ん、語を換へて云へば

成吉思汗亦バイカル湖の感化を受けたり

となすことを得べき也、世界に於て最も深き水と最も高き浪とを有せるバイカル湖の感化は、世界に於て最も度高く量深き侵略を行はしめたり、歐羅巴にては

成吉思汗が五年間の侵略の爲めに、五百年間舊に復せざるの創痍を與へられたり

と云ふ、所謂、

成吉思汗が馬蹄の過ぐる所草再び生せざる

もの是れ也、而も、バイカルにして始めてバイカルの感化あり、日

琵琶湖、瀬戸内の吉成の感化は、思想汗顔を掠めこと能はず

本の琵琶湖、瀬戸内等の感化が、成吉思汗の侵略を醸すこと能はざる固より其所なりとす。

其四　風景の感化の利弊と其受用

既に、明麗潤澤にして温雅和暢に、淡中に深味ありて味ふれども盡きざるを特色となす所の、日本の風景が、國民性に好感化と惡感化とを兩つながら與ふるものなりとせば、其好感化は飽迄も正當に受くると共に、一面惡感化を避くるの方法を講せざるべからざるにあらずや。

如何にして之を避くべきか、幸にして、今日の日本及び日本人の地位は、其方法を講ずべく便宜なるもの也。

予は敢て主張す

風景の惡感化を免るべき方法

國民宜しく海外に向つて、第二の日本を建設すべく出發すべし、と、北米可也、南米可也、濠洲可也、印度可也、亞弗利加可也、布哇可也、比律賓可也、朝鮮は固より云ふ迄も無くして、滿洲可也、蒙古可也、支那最も可也、或は石の如く他と合せずして獨り固より、或は砂の如く形を保ちつゝ他と混じ、或は鹽の如く他の水に溶解して而も之に今迄無かりし鹹味を帶ばしむる等、何れにても、其時と所との宜しきに隨ふべき也、斯くて、日本人は始めて其風景の惡感化を免れて、其好感化の上に或ものを加へつゝ

能く、過去に無かりし大事業、大發明、大哲學、大美術、大詩篇、大作物、大陰謀、大雄圖を成す

ことを得るに至らん。

爾く方針を定めたる上、世界の全面、バイロンが所謂南極より北極に至る迄を以て、日本人の大なる工場となし、其活動の大舞臺となしつゝ、顧みて

日本人は日本を別莊的遊樂地となすべし

法衣を着ても狼は狼

日本をば其歸休の田園と同視し、島上に設けられたる別莊的遊樂地と爲す

べき也。

而も是れ至重至大なる問題にして、單に風景の上より論ずべきにあらず、否、寧ろ、此の如き問題は普通に風景の上より論ずべきものと認められざるを以て、或は却つて、予が風景上より之を論ずるを怪むべしとする人あるべきが、法衣を着ても狼は矢張狼にて、予自ら平生の本色の物に觸れて發するを如何ともすること能はざる也、加之、問題は一なりとも、之を正面よりするの外、裏面、側面等よりも亦解釋すべきものなるを以て、現に風景論をなしつゝある予が、便宜上、風景觀より之が解釋に當るも、亦肯て唐突の態度と目せらるゝを免れ得べきを信ず。

其五　日本に雄大なる風景無し

繰り返して云ふ、日本には雄大なる風景無しと

勅勒川、陰山下、天如穹廬、籠蓋四野

と云はるゝ塞外朔北の偉觀

黃河遠上白雲間、一片孤城萬仞山

と云はるゝ、日本の本州より倍以上もある長江の大景

彼の皚々たるものは雪山の雪、此の滔々たるものは恒河の水

とある印度の山河

エホバの道は旋風に在り、雲は其足の塵也

とある亞剌比亞の砂漠

汝等奮へ、四千年の星霜に打勝ち來れる大なる三角塔は、汝等の功業を批評すべく俟ちつゝあり

と絕代の英雄をして叫ばしめたる、雄渾高古なる埃及の風物

予は絕壁の上に立てり、海は、予が足指の前方數寸の所より垂直に二千尺の下に在り、見よ、時は方に中夜なるに、漂へる氷

日本に雄大なる風景無しと

山の彼方より、凍結したる血の如き太陽は昇りたり

と奇矯の詩人をして呼ばしめたる、怪奇偉大なる歐羅巴最北の景色、獨り是等に匹敵すべき風景無きのみならず、亦是等に似て小なるものさへ、日本に於ては無き也。

武藏野は月の入るべき山も無し尾花が末にかゝる白雲

の和歌も、所謂歌人は居ながらにして名所を知るの格にして、眞に武藏野に對しての實景實情とは信ぜられず、現今の武藏野は固より原野としての風景を成さずして、古への武藏野と雖も、亦凹凸多くして平面の部分少なく、縱令盡く平面ならしめたりとて、之を大陸の大平原に比ぶれば、畢竟猫額的小地面に過ぎず

天如穹廬、籠蓋四野

の趣は斷じて求むること能はざりしなるべきを知る、又

火の山の煙の上に我立ちて那須野に垂るゝ雨を見し哉

とは予の拙吟にて、之を得たる時には頗る雄大なる風景に接したるの感ありしが、これとて、極端に云へば、野を隔てたる彼方の山が鼻端に觸るゝ程の小景に過ぎざるのみ、己むを得ずんば

富士の裾野

の、瀧河原山王臺あたりに立ちて、夜は石室の燈火も見ゆるほどに近き富士をば右に、やゝ遠き箱根を左になして、奔馬の如き愛鷹山を前に望み、林叢草萊相連なりて莽々たる裾野の大觀を領するを以て、日本に於ける雄大の風景なりとせん、されど

これにも亦島國的彫琢の趣の帶ばるゝ

を免れずとなす、其他

小諸出て見りや淺間の山に今朝も煙が三筋立つ

の俗謠、及び

信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷲の翼も撓に吹く嵐かな

の和歌に表せらるゝ山國信濃の高原、或は、北海道札幌附近の平野の觀望等、日本に於ては比較的雄大とすべきものなりと雖も

其氣味、其風色、其に未だ島國的なるを免るゝ能はずして島國の風景は何所迄も島國の風景也、何れの部分に於ても、眞に雄大なる風景は見出だすべからざる也。

其六　雄大なる風景とは何ぞや

但し、雄大とは高山の頂上より展望したる風景を云ふにあらず、高山の頂上より展望したる風景を以て雄大となすべからんには、風景の雄大は、觀る者の立場たる山の高さに正比例をなすのみにして、其他に何等の條件を要せざるべく、斯くて、富士山の頂上より展望したる風景よりも、臺灣の新高山のそれは、より雄大ならざるを得ざる筈にて、風景の雄大なるを知るには、態々足を運ぶにも及ばず、一室の中に坐しつゝ、算盤を取りて世界の山の高さを計り、其差を比ぶるのみにて事足らん、風景の差等豈此の如く算盤勘定を以て別つべきものならんや。

乞ふ聞け、風景の雄大とは

體軀の偉大なる人は、たゞ其手を見たるのみにても常人と異なるを知る

べきと齊しく

千萬里に連なれる陸地の雄大なる規模を窺ふに足るべき徵候を、一見にて盡くすべき其局部に認むる

もの、即ち是れ也、譬へば、幅數里乃至十數里にて、其上流も下流も共に茫々たる煙雲の中に隱るゝ大河は、肉眼にて見得る所まことに其一小部分に過ぎずして、或は我が國の琶琵湖を其中程より見たるより小なるべしと雖も、縱横數千里に渡れる大陸にあらずんば、決して此の如き大河を成し得ざるべきを意識すると共に、雄大の感頻りに動き來りて、目に見えざる煙雲の外なる上流下流をも、眸中の景色と接續して腦裡に畫き來り、眼界に入り來れる孤帆を指して、は、日邊より來れるものとなすに至る也、なほ其河の岸より連なれ

る平野ありとするに、是亦、一望際涯無く、蒼天直ちに黄砂白草に垂るゝを見て、直ちに其大を意識するにあらず、此の如く廣大なる平野の周圍、更に廣大なる陸地ありて、平野は恰も頭髪中に於ける赤小豆大の禿げの如くなるを思ひ、而も、眼界に入る部分が、赤小豆の更に幾十分幾百分一なるを思ひて、眼界以外の部分をば腦裡に畫き來り、始めて雄大の感に打たるべしとなす、若し又、其平野の何も無き間に、一條の煙の細々と立つなどの點景あらば、雄大の感之に刺戟せられて一層加はり

絶漠孤煙直、長河落日圓

と云ひ、或は

白日依山盡、黄河入海流

と云ふ如き、雄渾の極なる詩想を湧かすに至らん、其他、水と天と相連なりて一見毫も海と異ならざる太湖も、之を繞れる陸地が、之あるを以て、千巒敷にこぼれたる一滴の水ほどにも苦にする無きを

思ひ來れば、其岸線との圓滑なる調和の間、海に對するよりも却つて雄大の感を刺戟するものあるを覺えざるを得ず、更に、埃及のピラミッドの如く支那の萬里の長城の如き人造物に對して、雄大の感を起すは、獨り、周圍の自然の雄大にして、好く是等の人造物と調和するのみならず、亦

雄大なる自然が人を刺戟して、雄大なる建築物を試みんとの感興の動くに禁へざらしめし事情

を窺ふに足るが故也、此に於て予は敢て曰はん、雄大なる人造物は、雄大なる自然に刺戟せられたる感興の産物なりと。

雄大なる風景の意義、略ぼ説明せられたるが如し。

其七　外に出てゝ雄大なる風景に接すべき日本人の必要

敢て、雄大なる風景は最上の風景なりと云ふにあらず、日本の風

景は雄大ならざるが故に價値少なしと云ふにあらず、日本の風景の明麗潤澤にして溫雅和暢に、淡中に深味ありて味ふれども盡くること無きは、其

世界無二なる最上の風景

たる所以にして、之を以て決して他の雄大なる風景に換ふべからずと雖も

第一　國民性に作用する風景の惡感化を免れんが爲め（必要）

第二　平生見慣れたる優美なる風景と全然異なれる雄大なる風景に接して、新たなる趣致を味はんが爲め（趣味）

第三　他の雄大なる風景に接したる後、自國の優美なる風景を益々優美に感せんが爲め（趣味）

の、必要上及び趣味上の三條件よりして、日本人は必ず外に出でゝ雄大なる風景に接するの機會を作らざるべからざる也。

但し、風景問題の外、更に日本人が外に出づることを必要とする重大なる問題ありと雖も、本書の範圍外なれば措いて問はざるの意は、既に之を述べ了りぬ。

◎日本風景八十一品

其一　春二十七品

春の大雪

本文は忘れたれど、與謝野晶子に

大雪の中より旭日の昇らんとするを見て、地球を一輪の白牡丹花に化せるかと訝りたる意味の和歌

ありしを記憶す、是れ實に日本の大雪にして、支那の大雪にも、露西亞の大雪にもあらず、而も、これより積もらんとする冬の大雪にあらずして、これより消えんとする春の大雪也。

露の盞は梅花に先だつ春の色也、春の香也、此玉一顆を見出だせば、千樹の寒林頓に春を湧かすを覺ゆる也。

廣瀬旭莊の詩に曰く

獨憐南國梅花早、一朶春光神武祠

と、實に、日本最初の天皇たる神武の祠に梅花を見る程、其風神氣

神武と梅花

格を得べきはあらじ。

梅花の風神を

鯉の音水はのぐらく梅白し

の句に見る。

梅花の氣格を

燭消えて梅ヶ香透る壁壽哉

の句に領す。

梅ヶ香の目にて見るべき場合

梅ヶ香の目にて見るべき場合あり、月ヶ瀬に宿して朝早く起く、日未だ出でず、窓を開けば一綫の氣あり

空氣よりは重く、水よりは輕く、其色碧ならんとす

微搖して人に觸る、之を捉ふれば物無くして、たゞ冷香の鼻に徹するを覺す。

日本の春霞

春霞の趣致は、最も、之を海上、寧ろ海灣及び內海に求むべし、而も、房州以西の太平洋岸、及び瀨戸內を以て優れりとなす、其草

臥れて憩へるが如く、憩うて睡を催せるが如くなる海に、岬角、島嶼、通船、漁舟等、重疊して幾十百層をなし

最も近きものゝみ實物にして、其他は、岬、嶋、舟の影の幾重にも重なれるものなる

が如き趣致は、到底陸上に見る能はざる所にして、就中、帆を揭げたる和船程、霞の爲めに美化せらるゝに適せるものはあらず、其所に特殊なる日本の春霞はある也。

霞は畫の朧にして、朧は夜の霞なること、既に他の章に於て之を述べたり、而も、日本に於ける春の夜の朧の景色程趣深きものは、他にあるべしと思はれず、實に、朧夜の趣致は

必ずしも何所と限らず、何の有る所と選ばずして、日本の全部が一様に美化せらるゝ

に在る也、櫻が全國を一様に美化すと云ふと雖も、是れ、十疊の座敷に十粒の豆を過不及無く撒くと云ふのみにて、未だ、十疊の座敷の全部を一枚の布にて掩ふ如く、朧の作用するには比ぶべからざる也、されど、其中亦特に深き朧の趣無きにあらず

女具して内裏拜まん朧月

の俳句に表せらるゝもの是れ也、内裏とは、舊幕時代に於ける皇居を意味するものにして、今とは異なれりと雖も、其深殿高古が朧の爲めに融和されたる趣は、今日なほ京都に到りて、殘れる建物の煉塀の外より之を窺ふことを得べし、而も、朧夜に舊皇后の塀外を繞り歩かんには、一人よりは二人が宜しく、それも、男性よりは女性の趣味を解する者を伴ふを可なりとする也、一人或は男同士の二人にては、古き繪卷物に在る古への内裏の趣は想像されぬ也。

桃花は、瀬戸内海の群島中、安芸に屬する、周圍五里二十七町の大崎下島を最となす、御手洗町を西に距ること十町、大長村に至れば、島の斜面の高坦なる部分に數百株の桃樹あり

瀬戸内の仲春に特有なる紫深き水霧に包まれて、其花皆紅霧を

春深くして且つ淡き或る一期の趣致

なし、人をして、島の肉も亦柔かになれるかと思はしむ

眞に日本一の仙島也、人の故らに至りて之を訪ふ無き、最も好し。

春深からんとして未だ深からず、春淺くして既に淺からざる或一期の趣致は、藤井竹外が

桃花水暖趁輕舟、背指孤鴻欲沒頭、雪白比良山一角、春風猶未到江州

花より深き春の趣味

の詩に一語を加ふるを要せず。

桃を假らず、櫻に依らずして、花よりも深き春の趣味は

ほろ〳〵と椿こぼれて雨霽む小瀬の春野に雉子鳴くなり

櫻花の緒

の域に在り。

篝火を焚いて見る古き都の櫻ぞ好き、されど、开は篝火の燃えつゝある間にあらず

火消え、人散じて、夜いたく更けたる時、彷彿として花間より

艶に物凄き美人を吐かんとするの氣配ある

吉野に限れる春趣

を取る也。

若しそれ

山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける

の趣致は、幾内到る所の山地に之を認むるを得べしと雖も、之に盡ぬるに

古陵松柏吼天飈、山寺尋春々寂寥、眉雪老僧時輕箒、落花深所說南朝

の感慨を以てするに至りて、始めて絶頂となすべく、然らば、吉野の外何れにも之を求むること能はず。

午前四時、上野の森に未だ俗客入らず、花皆頭を垂れて睡る、忽ち白模糊の間を貫きて一聲の獅子吼あり、萬樹相戒めて微動を傳へ、花神覺むる所清氣を吐く、妙味は

動物園の獅子吼と曉櫻

獅子の吼え止みたる一刹那、彷彿として花と花との打呟ぐを聞く。

に在矣。

櫻が日本に開くにあらずして、日本が櫻に開く也、されば

此樣な末世を櫻だらけ哉

と唱きて、日本を一幅綠白の活畫と觀じたる一茶坊主に與す。

山陰山陽菜花千里の春、酒よりも食ふ物の旨き旅也。

暮春は、何よりも、名の無き詰まらぬ小川に沿うて行くに趣あり、それよりも、名の無き詰まらぬ山路に分け入るに味あり、而して、路傍より

何か價の無き物を盜み來るに最上の趣味

あり、日本は必ず汝をして得る所あらしめん、但し、少しにても名のある山川にては駄目也。

日本にては、春深うして、風景狂となりてフラ〳〵と家を迷ひ出たし、其儘行衛不明となる、殊勝なる心掛けの者の、毎年二三人づゝありても好さゝうなもの也、人知らず人到らざる

價の無き物を盜み來る趣味

風景狂

深山の櫻の下に倒れ死して、其木に肥し

翌年より更に一層好き花を開かしめんとの、尊き聖徒の、たまには一人ぐらゐ出さうなもの也。

情死ならば、嵐山の中腹以上に一圍をなさる花の櫻の下が好し、必ずしも及物を要せず、必ずしも短銃を要せず、必ずしも激毒藥を要せず、滿身落花を浴びつゝ相抱きて、情眞に凝り、身眞に凝り、凝然として夜より曉に徹せば 丈夫

大抵は花の爲めに凍死するに至る

べし、若し凍死と云ふが妥當ならずば淸死と云はん。

春湖酒の如く、魚皆醉へるに似たり、潮來出島の眞菰未だ深からざる所に立ちて漁舟を呼び、數尾の銀鱗を買ひ、之を肴となして、湖の色せる綠酒を酌む、此間人界に花あるを忘る。

海棠は、鎌倉比企ヶ谷妙本寺の堂前に見るべし、兩樹相對して高さ二丈に過ぎ、方數間を蔽ふ、蓋し、日本に於ての珍となす、而も、

花下の情死

海棠の美

純日本的風景の極致

其花の櫻より濃艶に桃より高雅なると、松杉に圍まれたる幽寂なる淨地に於ける雄大古朴なる建築物との對照は

高貴の美人が憂を失うて世を恨み、落飾して佛に事ふべく、寺に來りて涙ながらに乞ひつゝある

に似たり、花時は確に往きて訪ふべき價あり。

春日社頭の晩春は、藤の趣を盡くすと共に、亦杉の致を極む、杉の古木にからみて咲く藤の花ほど、幽婉にして高古なるは無く、而も、之に華表と鹿とを配合したるほど

純日本的にして且つ純日本的風景の極致

なるは無し、人に飼はるゝ鹿と、鹿を帶ぶる華表とは、多くの所と時とに於て俗的趣味なるものにて、獨り、奈良の藤花の候に於てのみ遺憾無く美化せらる。

極めて好きは

草臥れて宿借る頃や藤の花

日本に於ける柳の美

八重櫻と風景

也、此段の妙意、旅行の趣味を解せざる者と語ること能はず。

柳は垂れざるそれを好しとす、垂柳は極まり切つて却つて俗趣味を爲し易きもの也、柳の最も好きは、城址の水減りたる濠に臨みて、粗野なる形に延びたる大樹の、晩春を告げ顏に、黃を含める蹴葉を着けたるが、何やら知らず、白き花を開ける木を挾みて、或は縱に或は斜に、五六樹相倚りたる也、其

打煙れる蹴綠の上に、壞れ殘りたる天守或は角櫓の聳ゆる

を仰ぎ瞻るは、松に優りて遙に繪畫的なる風景也、而して、日本到る所に此種の配合を見出だし得べし。

櫻を一重に限れるものとなすは、俗趣味を厭うて却つて俗に陷らんとする者也、肯て

奈良七重七堂伽藍八重櫻

の句あるに據れるにあらずと雖も、日本風の雄大にしてドッシリと沈着きたる古き建物と調和すべく、輕浮なる一重櫻よりは、重みの

ある八重櫻を優れりとなす、但し、一重櫻の一樹宜しく百千萬樹亦可なるとは異りて

八重櫻は、一兩樹或は三樹、他の綠なる木の奥にほの見ゆるを好しとする

也、晩春の重く温き空氣と相俟つて、人に睡を催さしむる趣致を取る。

牡丹は風景を成さず、日本的にあらず。

春を通じて第一の趣味は、土壌豐潤、油を含むが如くなる所に、名も知れぬ諸種の雜草が

或は飴色なせる、或は紫なせる、或は萠黃なせる、或は紅を帶べる、無數の蹴芽蹴葉を吐きて、丁寧に大地を彩る

に在り、而して、是れ或意味に於ては春色の基礎なりとす、花を開く草は別也。

其二　夏二十一品

躑躅の在るべき所

躑躅を一區域に集めて見るものとなすは、俗的趣味の極なるもの也、東京に於ける、大久保及び日比谷の躑躅園是れ也、殊に、黃黑色或は黃白色なる地面と此花の色との不調和さ加減は、田舍娘に眞赤なる着物を被せたるよりもなほ見苦しきもの也、さらば、此花は如何なる所に在るべきものなるかと云ふに、かの

或一部の人が日本の風景の特に尙ぶべき所以となす奇巖怪石の間に在らしむるに適せる

也、耶馬溪にても、御嶽昇仙峽にても、他の季節に於ては左程感服すべきものにあらざれど、たゞ此一時に於ては、巖石に生じ、及び巖石を挾める樹木皆若葉して、其怪奇に失せる圭角を包み、加ふるに、蹴綠に點綴するに、燃ゆるが如き鮮紅を以てして、兩々其色を發揮しつゝ人目を之に奪ひ、美觀を爲すべく過度なる巖石の形狀色相を著るしからざらしむるが故に、一種特別なる中和の美を成し得る也。

杜鵑の血の凝りて成りたる花は鑑賞にあらず

日本が日本らしくなる時

是亦日本に限れる風景

卯の花の衰微

杜若、菖蒲は、之を池邊澤畔に在らしめて夏の趣を成さしめんよりは、寧ろ、之を古き茅屋の上に在らしむるに如かずとなす、初夏の濕潤なる空氣は、天を深き思に沈ましめ、地を人知れぬ涙に沾はしむる趣あり、此時、戸塚、程ヶ谷、鎌倉等の農夫棲む古き茅屋の棟の上に、紫濃く咲き聯ねたる花菖蒲を見れば

日本と云ふ國は、かばど迄趣味深き國なるかと感謝する

の意を禁ずること能はざる也、而も、躑躅を以て杜鵑の血に染められたる花となすは淺薄にして

此、屋上の花菖蒲てそ、杜鵑が吐ける血の凝りて成れるものとなすべけれ、杜鵑の血は紫なるべし、紅なるべからざる也、夜半人靜まりたる時、杜鵑竊かに來つて屋上に止まり、其玉の如く凝りたる紫深き血を吐けば、即ち開いて花となるべし、是れならざるべからず。

若葉の京都、若葉の奈良、若葉の日光、或着眼點よりすれば、若葉は花よりも美しく、花よりも趣深し、加之、若葉の頃には、春に無かりし極めて白き花、極めて赤き花、極めて紫なる花ありて、之と相映發す、實に

日本が最も日本らしくなる時は若葉時

にてある也、而も、日本に於ける若葉の趣致の極は

富士一つ埋み殘して若葉哉

と云ふべき風景に在りとなす。

若葉を淺綠の雲となし、大空を霧に掩はれたる限り無き水となして、巨大なる金色の鯉魚を泳がしむる五月幟は、亦、自然と人工との間に別樣の調和を試み得たる、日本に限れる風景なりとなす。

卯の花の趣致の、漸次日本人に閑却せられ來りたるは、實に慨歎に堪へざる傾向也、予の少年時代には、東京にても、山の手或は向島の奥などに、時に或は見出だされ、殊に、予の故鄕秋田にては、町の兩側盡く卯の花垣の所などありしもの也、前には、時鳥と卯の

花とは離るべからざるものとせられ

闇を劈く時鳥の鋭き氣勢と、花の中に是程白きものは無くして、雪とも何とも譬へん方無く、五月闇の夜を照らす卯の花の色と

は、趣味の對照此上無く

夏立新鵑叫過時、居人喜聞旅人悲、夜來齊破兩家夢、月照水晶花一籬

の所謂水晶の花一籬は卯の花籬にして、如何に卯の花の白きかは

卯の花の斷え間敲かん闇の門

の句に證せらるゝ如く、實に、豈は左程にも思はねど、夜となれば、中より光を放つかとばかりに白く美しく、而も

極めて日本的

なるものなるが、此頃は、卯の花と云へば豆腐の滓かと思ふ者多くなりたるこそ口惜しけれ、予は之を以て日本に於ける重要なる問題の一となさんとす、初夏の或る一期を支配する卯の花美を復活せし

め、而して之を助長するは、日本に於ける現下の急務の一也、如何に日本に軍艦が多くなり、如何に日本の鐵道が蜘蛛の網の如く複雜になりたりとて、自然の破壞と共に珍重すべき日本的趣味の失はるゝは、決して喜ぶべき現象にあらず、俗物はたゞ金錢に積もつての價値ある美術品の保存にのみ腐心す、彼等我黨にあらざる也。

西の淀、東の利根、水樓に座して水無月の鯉を切らしめ、其肉の一片々々活きて飛ばんとするものを以て酒を助く、是れ絶えて日本以外に無き所の趣味。

河を引きて田に注ぐの溝渠、其岸緣及び底部の狀態は、いたく年經りながら、活水滾々として常に新たに、之を探つて、鯉、鮗、或は鰻を得べきもの、此種の水脈は、苟くも河あり田ある所には必ず見出ださるべく、而も

其底には大抵川骨の花ありて、其淀める所には大抵浮萍の花を認む

べし、露の晨、螢の夕、其岸をそゞろ歩く程夏の趣の身に泌むは無く、加之、岸には、必ず野茨の花の白く芳ばしきあるべく、時として、野生の花菖蒲と白百合とに逢着することも亦無きにあらざるべし。

日本は幸ひにして狹小なる島國の割合に高山に富む、富士山を始めとして、他の季節に於ては白銀の甲冑に身を固めて人を防ぐそれが、此時期に入るや、武裝を撤して我等を迎ふるに至る也、されど富士登り、御嶽登りと云はず、何時迄も富士詣で、御嶽詣でと呼びて、山の神聖を保護するを可とす、白衣にして鐸を帶ぶるは、風致に於ても極めて高山と調和するもの也、富士の絶巔に立ちて千秋の雪を嚼みつゝ、俯仰天地を小なりとなす、大に快、深く信中に入りて、横さまに日本アルプスの連峰を蹈破する、更に大に快。

日本は幸にして幽谷深林に富む、其谷の深く遠く、其林の密にして高きは、國土の規模狹小なるだけ、之を日本に求むべからずと雖も、代りに

其淨潔にして大なる碧玉を彫り凹めたるが如く

而も、絶えて瘴煙惡霧猛獸毒蛇の患無（臺灣、琉球、及び北海道、樺太を除く）きは、特に日本に下されたる天福也、或點に於ては、水源を趁うて溪谷を極むると、山嶽を攀づる以上に夏日的趣味也。

山高く、谷深く、湖廣く、瀑長く、木怪に、草奇也、日光を指して日本の夏を見よと他に誇るを得べし。

夏の月は海に限れり、樓よりも船ぞ好き。

時としては、夏の夜、それも、暮れて幾ばくも無きに、春に劣らぬ朧の趣を呈することあり、鎌倉八幡宮より直線に引かれたる道を、長谷或は名越の方向に折れずして、淋しき松並木の間を由井ケ濱邊に向ひ、一の華表の石の色の潮風に鏽びたるあたりに彳みて、松葉越しの月を仰ぎつゝ

潮曇り松に籠もりて月淡く古き都を夏の臘夜

と朗吟したる我が聲の、打震ふを覺ゆるほど、それ程感深し。

夕顏の花空しく白うして、女は昨夜心にもあらぬ所に嫁きぬ、此夕、門田の稻の戰ぎに連れて、いつもの尺八の音哀れに聞こゆれど、之を吹く人は夕顏棚の下を覗かで過ぎぬ、田舍の夏の戀は趣深きもの也。

木曾の溪谷、杉黑く水白きの所に於ける夏日の生活を羨む、卽ち木曾の御嶽山は夏でも寒い袷やりたや足袋添へて

なるもの也。

夏の晝に見るべきものは雲にして、夏の夜に見るべきものは火也、而も、電燈よりは瓦斯燈優り、瓦斯燈よりは石油ランプ優り、石油ランプよりは蠟燭優り、蠟燭よりは焚火優る、夏の草鞋旅は、夜の明けぬ間に立ちて、山より吐かるゝ宿雲の變幻を見、それが收まりて、天の一方に奇峰を聳やかす層雲の、美しく日に輝くを望むに至らば、野頭水湄の涼しき茶店を借りて晝寢を始むべく、斯くて、悠々として日の入るを待ち、林の腰が夕煙の白きに撫で消さるゝ頃より、そろ〳〵又歩み出だして、行く〳〵火の趣を味ひつゝ、早き家の寢仕度に取掛る時分に始めて旅籠屋に着くを可とす、別けて海岸の旅にはそれが好く

短夜や波打際の乘て篝火

の句の如何に妙なるかは、日本到る所の海岸に於て之を味ふことを得べく、殊に、安房、相摸、攝津、播磨等に於て、其趣深く、之に、烏賊などを釣る舟の篝火が海上に散點せる風致を加へ、其他、朝迄斷えず人聲ありて

夏の夜の海岸の旅は、少しも心細からぬもの

也、第一、波打際の砂の適度に濡れて固まりたるを蹈むほど、歩き心地の好きは無し。

夏の夜に、沼或は河のほとりの淋しき所を行けば、河童、水獺、

蓮の根を嗜む日本人と其花

鯉の年經たるものなどの人に化けたるに逢はるべく思はれて、周圍の風物に云ふべからざる趣味を感ずるもの也、是れ、古くより遺傳せる日本的趣味也。

蓮は元來日本的趣味にあらざれど、其在り所に依りては亦鑑賞に價せざるにあらず、寺院の庭の池のそれは餘りに極まり過ぎたり、東京に於ける不忍の蓮は、錢を取らぬ見世物のみ、予は、林を隔てゝ其裏手の隙かし見らるゝ村を控へつゝ稻の波の上に抽ける、蓮田の蓮を趣味ありとなす者也、即ち

妙に蓮の根を嗜好する日本人が、其根を採らんが爲めに植えたる蓮の、申譯迄に花の著けたる

を好しとする者也、之を以て蓮花の日本化されたる風景となすは非歟。

最も夏を代表せる花なり葉なりは蕣也。

夏に適せる

與州金華山に到るべく、水を隔てゝ渡船を呼ぶに、オーイ〳〵と

趣味の極

珍奇なる夏景

日本の秋を知らしむる樂

聲を發せずに、路の傍なる吊鐘を撞く也、以て夏に適せる趣味の極となす、知らず今もありや否や。

夕立の趣味は京都清水に過ぎたる所無し。

北海道の森林も亦夏に行きて見るべきもの也、トヾ、蝦夷松等の松栢科に屬せる大樹を基本となして、之に、槲、板谷楓、山漆、ガヾ等の葉茂りたる木を配し、下は、長け一丈餘にして、葉の大きさ比目魚の如くなる虎杖と、傘より大なる蕗とにて土も見えず、其雄渾にして深邃なること、到底內地に求むべからざる也、加之、其最も珍なる所以は

夏方に半ばなるに、山漆の葉の部分々々は既に紅に染まり、而も、一方に於ては、蕗、虎杖に打雜りて鮮やかに開ける、菜の花の黃を見る

に在りとなす、春と夏と秋とを結合したる風景は是れ也。

日本の秋を知らしむる業

其三　秋二十品

夏より秋に移る一時程、趣味深く感慨多きは無し、元來、春より夏に移ると秋より冬に移るとは趣を同うして、共に後の期は前の期に或度を加ふるものに過ぎずと雖も、冬より春に移ると夏より秋に移るとは之と異にして、共に前の期盡きて後の期生ずるもの也、而も、冬より春に移るは、自然に冬盡きて春生ずるものなりと雖も、

秋は爾らずして、竊かに來りて夏の領分に侵入し、十分に潛勢力を養うて後、一時に喊の聲を擧げて夏を驅逐

する也、斯くて、心を潛めて、竊かに侵入するの秋を、梧桐の一葉落るに認め、晨の空の姿に認め、夕の灯の色に認め、笛の音に悟り、茶の味に知りて、以て自ら警むる程、感深きは無し、されど、嚴密に云へば

梧桐の一葉に依つて始めて知らるゝは日本の秋にあらず

して、寧ろ支那の秋なるのみ、日本にては、梧桐よりも何よりも

盂蘭盆の灯の色

日本の野を秋にするの女郎花、桔梗

先づ其特有の櫻の葉が黃落して秋を知らしむ

る也、未だ夏の衰へたるを覺えざるに、蚤くも櫻は其一葉二葉の半ば色變じたるを落して、秋の來れるを警告する也、之に注意するを怠らざれ、古へに愚劣なる和歌あり、曰く

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

と、風の音に驚いて始めて秋の來れるを知るは迂の極也、是も亦、歌陽脩の秋聲賦などより來れる翻譯的思想の產物なるのみ。

盂蘭盆は秋の趣味也、故に陰曆の七月にてあるべきもの也、之を陽曆に改むることに依つて、盂蘭盆の趣味は全く失はるゝ也、曰く切子燈籠、曰く高燈籠、曰く迎火、曰く送火、是等の火を籠めて、哀れ深き秋の色となすは、陰曆七月の露けき夜の氣ならざるを得ざる也。

女郎花、桔梗を主となせる草花の景色は、日本の野を秋になすべく、強き神秘の力を有し、菫、蒲公英等が野を春にする度よりは、

遙に高きもの也、黄と紫との別こそあれ。

其色、其姿共に、秋なるものを表現するに、一分一厘の過不及無く適度なる點に於ては、女郎花、桔梗の間に甲乙無く

而も、女郎花、桔梗の野と配合好き點景は、西洋風或は支那風の家屋にあらず、西洋服或は支那服の人物にあらずして、家も人も純日本的ならざるを得ず、純日本的にして且つ野趣を帶ばざるを得ず、就中、日本一なる草の秋の趣味は

富士の裾野

に在りとなす、高原秋早く、既に八月に入りて、富士詣の客の來往なほ繁きに、草は皆秋を花にする也、此間、絲立を背にし編笠を頭にして駄馬に跨れる古き姿の人を點ずる程、好配合なるは無し、之を對比するに

春の草花は平野に適して、秋の草花は高原に適し、春の草花は牛と配合好くして、秋の草花は馬と配合好き

何所迄も秋の春に異なれるを見るべしとなす。

萩のみは、自然のものよりは人に養はれたるそれが好し、左右より垂れて小徑を埋め細流を蔽ひ、花一升に露一升の混和を以て秋を彩るは、野生の萩に求むべからざる趣也、幸にして

日本人の萩を養ふを喜ぶこと、其卯の花を等閑に附するが如くならざる

あり、人をして、到る所の籬落園圃に、戀に病める少女の姿を憐むを得せしむ。

秋の神髄は蘆花に在り、而も、最も風景上に於ての蘆花を重んずるは支那人なりと雖も、日本人も亦尾花と稱して其趣致を尚ぶこと、肯て支那人に劣れるにあらず、一たび

鶉鳴く眞野の入江の濱風に尾花波寄る秋の夕暮

の和歌を唱し來れば、蘆花に美化せらるゝ日本の秋の或一期の光景、彷彿として眼前に開展するを覺ゆる程

すべての日本人は蘆花の美に趣味を訓練せられつゝ

ある也、但し、古へは、蘆花の上に大なる圓き月を畫けば、直ちに是れ武藏野の圖と會得せらるゝ程、それ程武藏野は蘆花の名所にして、難波江と蘆とは、和歌の材として離るべからざるものとせらるゝ程、それ程難波江も亦蘆花の名所なりしが

武藏野、難波江共に運命を同うして大都に變化し、古へ尾花の波寄りし所、今は甍の波打つを見る

を遺憾となす、されど、此絶好なる蘆花の二名所は滅亡せしと雖も、人をして失望せざらしむべく、日本到る所の高原、平野、河江、湖沼は、爭うて蘆花の美に秋の一期を作りつゝある也、而も

白蘆紅蓼

の四字を連續するに至つて、限り無き神味を生じ來る如く、蓼花も亦蘆花と共に秋の一期を分ち領するものにして、蘆花の白と蓼花の紅との配合は、紅葉の紅と菊花の白との配合以上なるもの也、實に

日本人が如何に蘆花の趣味を解し且つ之を愛するかは、中秋明月の夜、家々月を祭るに、必ず蘆花を供せざるべからずとなすに窺ふべし

となす、日本は、梅花國、櫻花國、菊花國なると共に、亦

蘆花國

なりと云ふべき也。

春に於て花に美化せらるゝ日本は、秋に於て又月に美化せらるゝ也、而も

中秋の月を最も好しとなすべきは支那にして、日本に於ては、北海道を除くの外、八月十五夜の月よりも九月十三夜のそれを優れりとなす、寧ろ、九月なりとて、十三夜より十五夜が優れる

也、月の名所としての武藏野は今破壞せられたりと雖も、地高く氣澄める信濃、白砂雪の如き山陽海岸、水光練に似たる琵琶湖等、日

本は未だ月を望むの所に缺乏せず。

平野の一端の漸次に高まりて、其上に林をなす程の木無く、大部分草に蔽はれて、而も其輪廓が柔かなる曲線を拖く所を、斜めに棹なせる雁の列が、殆んど腹を磨らんばかりに越え來れる、極めて日本畫的風景也、かの一部の人が云ふ如き

奇巖怪石の風景と秋の雁とは調和せざる

ものと知るべし。

秋曉に馬を驅り、秋夜に劒を看る、此趣味最も日本人の解する所たり。

敢て秋高馬肥てふ成語に泥むにあらずと雖も、既に、桔梗、女郎花の如き優しき花にてさへ、春の草花の如く牛と調和するを見ずして、馬と好配合をなすを覺ゆる程、それ程秋の氣は警健也、故に、

滊車の旅行よりも、滊船の旅行よりも、人力車の旅行よりも、徒歩の旅行よりも

秋は鞍上の旅行を以て最も優れりとなす也、信州、奥羽等の僻陬に行けば、今もなほ駄馬の背に跨りての呑氣なる旅行を試むることを得べく、箱根の舊道にてさへ、頼めば馬を儆はれもする也、殊に

秋草撩亂たる那須野に、五里の路を鞍上に搖られつゝ、黑磯より那須温泉場に向つて行くを、日本の秋の旅行の極致

となす、馬聲空原に響きて、尾花の穗を搖かすあたり、那須嶽の噴煙の横さまに靡くを見るの時、何人か是れ詩人ならざらん。

馬に乘るのみがそれにあらず、馬を見るも秋の趣味也、那須嶽の中腹、温泉場より遙に登りて、約四千尺の高原に、放し飼ひの野馬の群るゝを見し人ならでは、共に之を語るに足らず、二首の和歌を以て之を表せん、曰く

四千尺硫黄の煙靡く野を蘆毛月毛の駒の國かな

白河の關を渡りて來る秋に蹬振ふ那須の荒駒

夜寒の木曾

と、其他、陸中、陸奥の高原平野の、海を壓せる所に至る迄、放牧の馬の群るゝを見るも亦好し、予は敢て曰ふ

馬は花以上の秋の野の花

なりと。

夜寒、即ち、蓋は左程に思はざれど、夜となりてやゝ寒みを覺ゆる頃の旅こそ哀れ深けれ、一茶曰く

膝頭木曾の夜寒に古びけり

と、日本は、如何に文明の爲めに破壞せられ、如何に鐵道の爲めに短縮せられたりとて、なほ、夜寒を味はふ旅行をなすべき餘地無きにあらず。

紅葉と北日本

楓は紅葉中の王なりと雖も、楓の力に依つて成る紅葉の風景は、無上に尙ぶべきものにあらず、故に

東京以北に於ける、常盤木を除くの外、何の木の葉も盡く色づき、純紅と純黃とを兩極となして、其中間に數十百の色の階級と、之に他色を混淆したるものとを含むの風景

を取るべしとなす、高尾、栂の尾、槇の尾よりも、日光、鹽原、碓氷は優れり、日光、鹽原、碓氷よりも、北越、奥羽の山谷は優れり、要するに、紅葉の秋は北日本のもの也。

日本に於ける秋水の色

秋水與長天一色てふ風景が日本にもあるものと思ふは誤まり也、是れ、大湖の風景にあらず、海上の風景にあらず、幅數里、長さ數百里乃至千餘里に連なれる大河にして始めて見得るもの也、即ち、大陸に限られたる風景也、されど

秋水如刀てふそれに至りては、日本に限れるものと云ふべからざるにもせよ、日本に於て一段其度の强きを見る

べきを確かなりとなす、滿山の秋葉紅黃の色を呈して、一匹の天錦を織り成せるの間、鑿にて彫りたるが如くなる谷底を走る溪流、之を高所より下瞰するの美觀は、人をして己れを忘るゝに至らしむるものなるが、之を形容して、錦に繡ひを置ける銀絲となすはなほ適

雲霧の變幻と秋景

濁酒の秋

水の秋の中心

切ならざるを覺ゆ、寧ろ

明晃々たる利刀を以て錦繡を兩斷せるものとなす

の優れるに如かざる也、眞個に秋水刀の如し。

雲霧の變幻も亦山の秋の美を助くる大なる力也、紅葉、綠樹、赭巖、白水、忽ち現れ忽ち隱れ、或は突如として峯尖を吐き、或は切斷したるが如く連峯の腰部以下を横に長く現はし、或は、上下を掩蔽して山の胸部のみを示す等、人をして應接に遑あらざらしむ、此景最も雨後の碓氷峠に見るべし。

銀杏樹の落葉と濁酒との趣味は、極めて好く調和するもの也、香には干魚を取るべし。

女郎花、桔梗等の所謂秋の七草及び白蘆紅蓼を總括して、之を草の秋となせば、之に對する木の秋の中心をなすものは

楓の紅にあらずして銀杏の黃

也、天を掃ふ箒の如くなる雄大奇拔なる此木が、皚然他樹を凌いで

秋と煙

立ちつゝ、金色の衣を着けて四邊を威壓するの狀は、何れの所に於て見るも風景の中心をなす也、而も

日本に於ては、銀杏の大樹のある所は、大抵神社佛閣のある所、巨大なる殿堂、高峻なる五重塔のある所

にて、兩者の配合程秋を莊嚴にするは無き也。

古歌に曰く

見渡せば花も紅葉も無かりけり浦の苫屋の秋の夕暮

と、浦の苫屋、何ぞそれ日本的なる、而も、浦の苫屋より夕煙立ちて

我が立つる煙は人の秋の暮

の趣を成すを取る也、煙と秋との調和の美は、紅葉の溪より昇る柮が焚火の煙よりも、尾花の上に靡く噴火山の煙よりも、一段、浦の苫屋より立つ煙を優れりとなす。

植物の實と關聯して特殊の趣味をなす秋あり、曰く、野葡萄の秋。

初草の秋、松草の秋、亦是れ、食物としてのみにあらざる趣致を成す、殊に、松葉を焚いて松草を炙るは、古き繪卷物に魂を吹き込みたる風景也。

菊と云へば、花壇の作り菊の事とのみ解釋する人の多きは、厭ふべき事實也、最も、花壇の作り菊、鉢植の菊も、一種の愛玩すべきものとしては、存在を認むべからざるにあらずと雖も、是れ

風景としての菊

にあらず、風景としての菊は、却つて、田園籬落の間、自然に隨つて偃蹇の態を縱ひまゝにせるのそれにある也、莖勁く花瘦せて、清冷の氣人を打つのみならず

其勝手に延びて自ら恣まゝにせる曲線の形態は、頗る周圍の自然と調和する

也、是等の菊は、必ずしも黄と白とに限らず、表紅に裏白きも、深紅にしてやゝ黒を帶べるも、皆棄つべからざる也、菊花と調和するものは、茅屋也、家鷄也、葉の落ちたる梅の古木也、而も、人家の樹への外ながら、之に遠からざる畑地に植え棄てられたるそれと紅葉との間の調和は、不思議なる程に好きものにて

破れたる鎧の袖も繕はん菊と紅葉の中原の里

の和歌の、素人臭きに拘はらずして黒人の至ること能はざる妙味あるも之れに由れりとなす。

米食國だけに、日本の稲の秋は到る所に特殊の風景趣致を爲す也、

就中

琵琶湖畔の稲の秋を最も優れりとなす、實れる稲の穗々として黄雲十里の觀をなす中に、案山子弓を張りて、遙に稲の波の果てに横たはれる湖水の鳥を射んとするの態をなす、又、白き帆の稲の上を辷り行くを見る、稲の香と水の香と相混じて、一種、廣く穩やかに豊かにして潤へる趣を感ぜしむ。

其四　冬十三題

紅葉黄葉共に地に委するに至りて、冬の或る期の老蒼枯淡なる風景に色彩を點ずるは

花にも葉にも此赤さ無き柿の實の色

也、佶倔として雪舟畫中の物の如くなる其木、圓くして赤く、日を受けて透明ならんとする其實、尤も、柿の實の透明ならんとする赤色は、其十分に熟せる上に見るべく、透明なる中に、火の燃ゆるが如くなる物あるを窺ふべし、而も幷は

熟き火にあらずして冷き火

也、實に、日本の冬景と柿との關係は、深く注意すれば注意する程趣味を生じ來る也、滿目老蒼枯淡の風景に、たゞ柿の一樹を點じて生氣を與ふるも宜しく、溪上十里の路、到る所高低層をなして、三々五々相倚れる其木を見るも亦可也、又、紅玉枝頭に累々たる光景も好く、寒鴉に啄み殘されたる二三四五顆の淋しく梢頭に殘れるも

惡しからず、日本に於ては

柿の實を見るの旅行

を試むるも敢て無意義にあらずとなす、大和、美濃、因幡等を始めとして、何所に行きても、日本には柿の木の無き山里は無し、東京附近にては青梅より上流の多摩川沿岸最も好し、柿は獨り

食ふべき實を結ぶに於て世界の珍なるのみならず、見るべき實を結ぶに於ても亦世界の珍

也、聞く、歐米人日本の果實の中最も柿を賞味すと、彼等果して柿の實を賞觀するや否や。

冬木立の風景と最も配合好きは赤塗りの建物也、赤塗りの稲荷の華表を俗惡なりとして排斥すること勿れ、それ等は冬に至つて始めて活くる也、奈良、日光、其他赤き物のある所の冬景は皆好し、淺草觀音堂を、境内の或部分なる冬木立の彼方に望む夕暮の景色も、決して俗惡なるものにあらず。

破れたる祠あり、何の神を祀れるやを知らず、後に老樹七八の盡く葉を脱して、蕭疎たる赤裸の姿を並ぶるを見る、而して、其後は沼也、是れ睡れる風景にあらずや、死せる風景にあらずや、されど其沼の水に羽美しき水鳥の泛べるを、木と木との梧瘦せる幹の間に望む

に至りて、云ふべからざる冬の趣味深底より湧き來り、人をして恍惚として自然の擒となるを覺えざらしむ、此種の風景趣致、亦日本の到る所に見出だすべし。

日本に野獸少なし、本州及び四國九州に於ては、狼も、熊も、大抵種切れとならんとす、されど、野猪及び鹿はなほ獵り獲るの少なきを憂へざる也、縱令、野猪と鹿との實物に逢はぬ迄も、此中にそれ等の獸ありと思へば、日本の冬の山も威嚴あるが如くに思はる、若しそれ

銀杏の葉の色に染めたる獵衣に、鹿の皮の裁附袴を穿ちて、髮

髮銀の如くになれる舊式の老獵夫

に逢ふあれば、冬の山の趣味更に深きを覺ゆべく、山中の村の或る家に、野猪或は鹿の吊られたるを見れば、其趣味更に々々深きに入らざるを得ずして、終に山中の家に宿し、榾火を圍んで野猪或は鹿の肉を啖ひつゝ、山に關する荒唐譚を聞くに至り、冬の山の致こゝに極まる也、而も、是等の趣味は、東京より遠からざる所にてさへ、秩父、日光等に至りて容易に之を嘗むるを得べしとなす。

茶山花は風景をなさず。

殘菊の傍に傘を干せる、極めて初冬の趣致也、又極めて小春日の趣味也、それも番傘に限れり、番傘ならば、油の色なほ黃なるものにても、古びて白くなれるものにても、何れにても好しと雖も、蛇の目にては配合惡し、況んや蝙蝠傘をや。

枯尾花に漁舟は支那的趣味なりと雖も、枯尾花に渡し小屋は日本的趣味也。

日本は特に霜の趣味に富む

雪の趣味

時雨は日本の奈良に降るべきもの也。

西洋に於ても支那に於ても、板橋は珍らしきもの也、故に、西洋の霜も支那の霜も、比較的詰まらなかるべしと思ふ、霜の趣味は實に板橋の上に在り、此點に於ては

橋と云へば殆んどすべて板橋に限れるが如くなる日本こそ、特に霜の趣味に富める國と云ふべき

なれ、但し、日本の名橋は大抵汽車の鐵橋と並びて風致を失ひたり、今日に於ては、名も無き片田舍の板橋の朝霜を取らざるを得ざる也、冬曉早發して

板橋曉霜白如雪、印着芒鞋第一痕

の趣味を賞むべく、態々旅行を試むる者は無き歟。

雪こそ、冬の期にての趣深きものなれ、暮れぬ中は雨なりしが、戸締まりをなして後

鐘の音の沈み加減のいつもと異なれるに、其雪と變じ來れるを

鮟鱇鍋或は河豚鍋

悟るは、四季の何れにも無く、自然の作用と人間の生活との關係に於て、最も感深きものとなす

也、又、雨より雪に變ずると反對に、雪より雪に變ずる場合ありて、其趣の更に優れるは

黄昏曖意城中催、微雪瀟々爲雨來、知是鄰樓夜會客、古琴絃弛聲調頽

の詩に依りて窺ふべく、酒も亦雪の夜程味ひ深きは無し、鮟鱇鍋或は河豚鍋、共に雪の夜に試むべきもの也、而して、風景としての雪も亦板橋に在り、番傘に在り

橋暮れてほのかに白し雪傘

の一句雪の精神に入る、なほ、雪の風景趣致は、田舍的にあらずして都會的に、小都會的にあらずして大都府的、山の手的にあらずして下町的に、日本橋的にあらずして深川的なるものと知るべし。

纔に芽を吹きたる麥の畑の彼方に、百姓の古びたる茅屋の障子の紙のみ、春を迎ふる用意に新しきあり、其障子一杯に日がさして、楹に吊せる甘干の柿の影を、色迄映るかとばかり鮮やかに描ける、東京及び京都を兼ねて、都の附近によく見る景色也、而して、動もすれば斯る家の傍には實美しき柚の木あり。

北海道の事は暫く云はず、本州にても、太平洋岸は利根川邊迄、日本海にては更に遠く山陰道の因幡あたりの川に至る迄、多少の別はあれ、冬期に入りて鮭の上るを見る也、痩せて澄みたる冬の川に三尺に過ぐる巨大なる魚が、思ふ所あるが如く、決する所あるが如く、半ば奮勵し半ば躊躇しつゝ遡る光景は、死せる冬の脈管に生命を注入するかと思はるゝばかり也、小さき川なれば小さき川なる程、其影響愈々大也。

太平洋側に於ても、日本海側に於ても、暖潮比較的岸に近づきたる結果として、古來雪國と稱せられたる北越、奥羽地方も、漸々積雪の量を減じ來れるは事實也、されど、なほ汽車立往生などの障害あれば、左迄日本の雪景の爲めに悲觀するにも當るまじ、扨て、雪景と云ふ以上、雪多ければ多き程、隨つて風景の價値も加はるべき筈なるが、實際は左にあらずして、總じて

雪國の雪、即ち、或期より或期に至る迄の數ヶ月間は、地上に固定せる雪の層を造る所のそれに、風景の好きを求むべからずとなす也、それとて、雪の盛に降りつゝある間、及び、大雪の降り歇みたるばかりにて、地上のすべての物を綿の如く柔かなるそれに包みつゝある間は好けれど、其短かき時間の外は、雪と雪以外の物との區別劃然たるに過ぎ、雪は餘りに白く、家屋、樹木、人間、狗馬、其他目に入る物は一樣に黑く思はるゝ程にて、其間に何の調和配合無く、却つて人に惡感を與ふるものとす、されば

風景としての雪は、雪國ならぬ所、即ちそれの地上に固定せざる所に見るべきもの

也、稀に降りつゝ、而も、雪國のそれの如く重く固きものにあらで、一茶が所謂

旨さうな雪がふわりふうわりと

の如く輕く柔かに

雪は巴と降りしきる

と云ひ

障子細目に引明けて、あれ見やしやんせ此雪に

と云ふに相應はしく、一種の意味を含みて、物に粘し、物を包むのそれにして、始めて風景の階級に入るを得る也、雪の珍らしき所の雪にして、始めて鑑賞に價する也、かの

隣にてまだ聲のする油賣り三尺積もる雪の黄昏

の雪、及び

これがまア生れ在所か雪五尺

の雪は、共に風景としての雪にあらざる也、故に予は、京都及び其附近の雪を以て風景としてのそれの最となす、東京及び其附近の雪も亦惡しからずとなす、雪景の双美は

雪に蔽はれたる松と雪に包まれたる寒紅梅

と也、北越及び奥羽の雪中には梅花ある無し。

◎東京及び其附近の風景の或る一致

其一　趣味ある研究問題

終りに臨んで、東京を風景論の題目となさんとす、されど、強ゐて試むる場合は兎に角、若し、虚心平氣に全國の上より大觀し來る時は、東京てふ人間の掃溜は、京都の如く、奈良の如く、風景上の議論を加ふべき價値あるものにあらざる也、故に、予の議論も亦東京を主題とするにあらず、或る見地よりして、比較的廣き範圍に於ける東京附近を對象となしつゝ、東京をば單に其一端に置かんとするのみ、勿論、所謂武藏野觀とも亦異なれり。

細かに注意せば、東京より下總の大部分、及び常陸の霞ヶ浦、北浦邊に至る迄

丘陵平野の狀態、土壌の性質色相、草木の種類、及び其姿態密度等の相一致せる上、著るしく水分に富みて煙霧多く、風景趣致の相似たるものあるを見る、而も、同じく下總にても、上總に接近したる部分は少しく趣を異にして、上總に至りては、其異なる度一段著るしく、又、他の一方の常陸も、下總方面の霞ヶ浦及び北浦界隈、利根川沿岸等を除くの外は、別に常陸的特色を有せる也、是れ偶然にして爾るか、或は此間を一貫せる理由ある歟、亦趣味ある研究問題にあらずとせず。

其二　上古よりの地理的變遷

地理的研究の結果、上古、而も神武天皇即位紀元よりもなほ新たなる時代に至る迄、下總の極小部分及び上總、安房の全部は、本州と離れたる大島にして、一方は、今の東京の大部分を除外し、越ヶ

河川の沖積作用は内陸地にせむ海岸線を変じ

谷附近を掠めて、常陸の女化原に觸れ、土浦の傍を過ぎ、斜めに磯濱に連なりての海岸線あり、其中間の、習志野、印幡沼、手賀沼、利根川、霞ヶ浦、北浦、都會にては、行徳、市川、松戸、我孫子、取手、佐倉、成田、佐原、香取、銚子、鹿島等は、皆内海の部分なりしを知らるゝに至りたり、而して、其現時の如き變遷をなすに至りたるは

主として大河利根の沖積作用に依り、荒川、中川等の之に力を添へたる功も亦少きにあらず、斯くて、長年月の結果は、内海をして陸地に變ぜしめ、離島を以て本州の一端となすに至り、而も、海中の比較的深かりし部分を埋却すること能はずして、之を、霞ヶ浦、北浦、手賀沼、印幡沼となしたる也、自然の作用も亦妙ならずや。

されば、其中間の土地の、種々の點に於て相似たるも、比較的水分多きも、殊に、霞ヶ浦以下の湖沼の、大小の差こそあれ、其風趣

の一致せる所あるも、それ等の理由一として解釋し難きはあらざる也、極端に云へば

不忍池と霞ヶ浦との間にも、亦切斷すべからざる骨肉の緣ありとすべき也、なほ

東京日本橋通りの熱鬧界と、狐が女に化けしてふ女化原とも、從兄弟ぐらゐには當る

なるべし。

其三　鷄肋的風景

以上の如き地理的變遷に成りたる陸地なれば、柔軟にして其間に骨節の認むべきある無く、隨つて

單調平凡にして、風景上別にこれぞと取るべき部分も無く

さればとて、亦厭ふべく棄つべきにもあらず、丘陵、平野、林叢、湖沼の配合に、何と無く趣致あり、之に名づけて

鷄肋的風景

と云ふべき也。

丘陵の輪廓に美なる曲線ある無く、樹木の姿態及び其配置に繪畫的趣致ある無く、水は澄まず濁らざる中間にして、都會及び村落の位置形勢も、自然に餘儀無くされて却つて風景としての價値をなせるもの無く、人家の建造亦求めずして雅致を呈せるものあるを見ず、住民の性格趣味より、其容貌風采に至る迄、何等の特色を有せざる也、之を譬ふれば

紡績絣を着たる美しくも無き女が、御世辭にもあらず、愛嬌にもあらず、亦、自ら笑ひたきにもあらで、たゞ挨拶にニヤリとしたる

が如きは、此地方の風景趣致也、たゞ、水分に富みて空氣の色の惡しからざるを取るのみ。

勿論、此地方の風景として、或る部分に於ける或場合には、亦人をして恍然魂逝かしむるもの無きにあらずと雖も、概して、以上に述べたる如き範圍を出でざる也、但し

大都として、天然と人事との相摩の間より特に生じたる東京的風致の價値

は、之を別問題として論せざるべからずとなす。

其四　予が趣味を感ぜし事

これは、以上の觀察と性質を異にする事なれど、予が趣味を感せし經驗を語りたく、特に追加をなすに及びたり。

東京に在りて、普通と異なりたる風景趣致の味ひ方をなさんとせば、須らく、東京の周圍の一週を試むべし、それも

晩春落花の候

に限れり、到る所落花ならざるは無してふ日を選ばざるべからず。

先づ、汽車にて上野を出發し、田端より山手線に入り、巣鴨、大

塚、池袋、目白を經て新宿に至り、更に南進して、原宿、澁谷、惠比壽、目黒、大崎を看過し、品川を經て而して新橋に到らば、こゝに東京の周圍の三分の二は過り了られたる也、此間、忽ちにして丘陵、忽ちにして高原、忽ちして溪谷、忽ちにして平野、忽ちにして叢林、忽ちにして田塍、忽ちにして村落の斷片、忽ちにして城市の尾端、天然と人事と咫尺の地を爭うて惡戰し、而も、天然の人事に破られて、恰も蒙古の來寇を受けたる壹岐、對馬の如き慘狀を呈しつゝ破壞せらるゝを見る、是等の光景は、尋常より云へば目も當てられざるべきものなるが

晩春の一時の空氣の色と、疎黄淺綠の煙を籠めたるが如き木々の若葉との爲めに作用せられて、眼に惡感を與へず、却て、其天然と人事との激しき戰ひの間にあらざれば見ること能はざる、一種の趣致を生じ

來り、飛び行く汽車の窓より眺むる活動寫眞的變化と相俟つて、頗る興味を覺えしむ、況んや

山の手の周圍は到る所皆花也、上野より新橋に至る迄、汽車は

たゞ紛々たる落花の中のみを飛ぶ

と云ふも、亦甚だしき誇張にあらず、汽車の疾きだけそれだけ、一地に於ける落花の雪の光景なは眼に殘れるに、更に、他の一地に於ける落花の雪の光景に迎へらる、斯くて、落花の雪を透して見る風景は皆美也、俗惡なる物も皆美化せらる、特に趣味ある部分を見出だして、後日此所のみを來り訪はんなどゝ思ふも、晩春のそれに限れり、他の季節に此汽車に乘りても、斯る部分を見出だすこと無し。

新橋にて汽車を棄てなば、直ちに徒歩して築地を横絶し、渡船に依りて月島に渡り、相生橋を過ぎて越中島に入り、海に迫れる深川の南緣を洲崎に向ひて行き、砂村に到り、轉じて龜戸に向ふべし、而して、龜戸にて汽車を拾ひ、曳船、白鬚、鐘ヶ淵、堀切等を看過して北千住を突き、北千住より他の汽車に倚り上野の出發點に歸著

強ねたる趣味

するを以て、一週の無事なる終了となす、此間一里餘の徒歩を挾むを以て、趣味更に生じ來り、平地の春、島嶼の春、大河の春、海灣の春、田間の春等を併せ傾して、亦、到る所に落花の紛々たるあり、龜戸よりの汽車に至りては、蓮華草、蒲公英を色となし、蛙、田螺を聲となす所の、田間の深春を味ふべく、既に經來りし部分と別樣の得る所あり、殊に

遊人落花と共に狂舞しつゝある、東京第一の花の世界向島を餘所になして、たゞ、チラ〳〵と隙間より、其花の木の上端を窺ふのみなる

強ねたる趣味にて甚だ好し、車中、花見の客の出入を見るも興あり、北千住より、向島と荒川堤との花の連絡を絶ち、左には一重櫻の雪と散るあるを望み、右には、物に隔てられて見えはせざれ、八重櫻の雲と開くあるを思ひ、大川に花見船の上下するを眺めやりて、汽車の飛ぶに任かするは

殘り惜しきが如く、又誘らましきが如く、實に一種異樣の感也、たゞ、此一週の試みの汽車にてのみ得らるゝ感也。

但し、此行、或は曳船あたりにて下車し、向島の土手を通過して、綾瀬の橋を渡り、荒川堤に向ひ、落花と開花との風景趣致を見盡くして、荒川の渡船に倚り、尾久を經て、三河島に汽車と再會するを可とするが如くなりと雖も、それにては、一週の趣意を壞るのみならず、亦一週の趣味を傷つくる也、向島及び荒川堤の花見は特に試むべし、一週のついでになすべきにあらず。

たゞ聞けば詰まらぬ事の如くなれど、此、落花の候の東京一週は案外面白きもの也、予をして敢て云はしめば、之を以て

東京に於ける花時の遊びの最も優れるもの

となさん、諸君之を試みよ、但し、汽車の接續の時間に餘裕ある場合は、宜しく附近を遊覽すべく、草鞋穿きの輕裝にて、二人或は三人相伴へるが好し、酒食を携帶すべきこと云ふ迄も無し。

陳腐な議論を避けるべく力めたり

日本の風景の特色に就いて

日本の風景の形造る所の皮肉なる所以

◎結論

其一　予は敢て日本の風景を論じたり

予は敢て日本の風景を論じたり、而して、敢て新論と命題せり。

固より、系統を立てたる組織的著述にあらずと雖も

他人の議論の踏襲に陥らざるやう、力めて陳腐を避けたる點は、讀者の諒とする所となるべきを信ず。

此に於て、最初には先づ

日本の風景を形造る所の皮肉とも云ふべき松と櫻

とに就いて言を費し、次には、日本の風景の何故に特に美なるかの問題に解答を與ふべく試みて

山丘溪谷原野、及び海岸河岸の輪廓をなす所の曲線の、柔にして秀で、適度に美的なると、之が衣裝をなせる草木の、姿態色相及び密度共に宜しきを得たるとの上、水蒸氣が濃に失せず淡

日本の風景と水蒸氣との關係特殊なるの關係

に失せずして、適宜に風景を美化するの作用を爲す

に在るを說き、而も、日本の風景の特に美なる所以は、火成岩の露出にもあらず、火成岩に對する流水の浸蝕にもあらず、水蒸氣の特に濃厚あるが故にあらず、亦其莽蒼跌宕なるが故にあらず、

日本の風景が水蒸氣の作用を得て美化すべく適度に、日本の水蒸氣は亦風景を美化するの作用を與ふべく適度に

水蒸氣は日本の風景を成す要素なりと雖も、

霞と朧

兩者相俟つて特殊の美を成すものなるを論ずるに及び、加之、水蒸氣の作用なる

太平洋岸と日本海岸の特色

とは四時常に在るものなるを指示せり。

大平洋岸と日本海岸との風景が、或る地理的作用と氣象との爲めに、著るしく趣を殊にせるを說きては

双方の風景の特色

風景として富士山の價値

琵琶湖の眞價

を別ち、進んで

風景としての富士山の價値

を論ずるに至つては、忌憚無く

富士山の風景としての缺點と長所と

を擧げて

風景としての富士山の價値と、風景以外に於てのそれとを混同

する、世人の蒙

を啓き、古來

富士を主題となせる詩歌文章繪畫の、殆んどすべてが俗惡なる

を喝破して、其所以を論じ、而して後、一轉して湖沼觀の日本を題

目となすに至り

風景としての琵琶湖の眞價

を始めとして、多くの湖沼を批評し、終には、太平洋岸、而も安房

以西に於ける海灣の多くが、湖沼的趣致を呈するものなるを述べ

瀬戸内海は湖沼的趣味

日本一の風景

松島の罵倒と稱揚

日本に於ける奇巖怪石の風景の眞價

日本の喬木美

瀬戸内海の、全然湖沼的趣致にして、而も其大規模に且つ極美

なる、推して世界第一となすべき

を主張し、極力瀬戸内海の美を發揮し、更に一歩を進めては、日本

の山嶽美と海洋美とを比較して

伊豆の突角と房州の鼻端との間に噴煙の大島を置き、富士を其

上に臨ましめたる、相模の海の大規模なる風景を日本一と賞讃

するに及び、一氣に筆を走らして

松島の風景を罵倒し、而も、獨り其雄島の夜の趣の他に得べか

らざるものなるを稱揚

し了るや、次いで

日本に於ける奇巖怪石の風景を列擧して、一々其眞價を評隲

し、其如何の程度に重んずべきやを知らしむべく試みたり。

遙に、卷首の松と櫻とを論じたる條と對照しては、日本に於ける

喬木美を說き、喬木美の實例を擧げ

日本と梅花

全く新なる問題

日本の風景と國民性の關係

老木大樹の保護の忽せにすべからざるを苦言

しては、一の老樹を倒すは、凡庸の人間十百を殺すに過ぐるの罪惡なる所以を說き、續いて、日本と梅花との關係を主題となし

世界に於て、日本の如く割合に梅樹多き國無きは何故ぞと問うて、日本人が梅干を食ふが故に歸し、日本は

本來櫻花國なると共に、亦梅花國なるを道ひ、梅の趣致を說くこと忠實也。

更に轉じては、海流の變調と風景との關係てふ學者は勿論、未だ何人も筆を着けざる問題を捉へて東北近海の潮流の移動が、東北地方の風景に變化を與へつゝあるを論じ、それより歩を移して、日本の風景と國民性の關係てふ根本的問題に入り

明麗潤澤にして溫雅和暢に、淡中に深味を含んで味ふれども盡くる無き、即ち、一言以て之を盡せば優美なるが、日本の風景の世界無二なる點

なりと雖も、天二物を授けず

日本の風景には雄大を缺くを以て、日本人は宜しく外に出でゝ、雄大の風景の何たるを知るべく力むべき

を切言し

如何なるを雄大の風景と云ふべき歟

の問題を解釋すべく力を傾けたり。

而して、最後に

日本風景八十一品

を擧げて、讀者と共に之を鑑賞し之を玩味すべく要したり。

此に於て、予は敢て

日本の風景を論じたり、日本の風景を論じて自ら之に新論と命題せり。

雄大の風景の定義

予は最も日本の風景を論じたり

と云ふも、亦、巣鴨病院内の某患者が、自ら世界統一を策し得たりとなすの滑稽程には、滑稽ならざるを得べきを信ず。

其二　記憶を參考となす

故らに云ふの要無きが如しと雖も、ついでなれば申置くは、本書の草稿を作るに當りて、予には一冊の參考書も無かりし事也。

尤も、予自身の著書數種は、參考として坐側に置かれたりと雖も、他人の手に成りたるものにては、たゞ、潮流變調の事を記したる報知新聞の切抜を用に供せしのみ。

其他は、引例し來りたる、日本、支那、及び歐羅巴の、詩、歌、文章、記錄等

皆予が記憶の底より引出だしたるものに過ぎざれば、或は枝葉の點に誤謬無きを保せず、されど是れ、一氣に所懷を披瀝するに重きを置きて、多少の參考書を渉獵しつゝある間に、或は感興の去らんことを怕れたる結果なれば、庶幾くは讀者の寛恕する所となるを得ん。

固より議論の根據に於ては、參考書を机邊に積むと積まざるとに依りて、動搖を生せざる也。

日本風景新論　完

日本名勝史蹟

伊藤銀月君著

近刊

日本に名勝多し、而も、名勝の地にして歴史上顯著なる事實を經過せし所ならざるは稀也、其風景に對して其歴史を想ふ、感興、蓋し之より大なるは無けん、著者既に一特色ある史論家として天下を風靡し、加之、風景を評隲するに於て凡ての文豪を舊式なりとなすの抱負あり而も其從來の著書を見るに、未だ本書の如く歴史地理兩面の長所を同時に發揮せるものある無し、故に本書は獨り世間の珍なるのみならず、著者自身より見ても亦極めて珍なる著述となさゞるを得ざる也。

明治四十三年四月一日印刷
明治四十三年四月七日發行

日本風景新論
定價金壹圓

著作者　東京市下谷區中根岸町十三番地　伊藤銀月

發行者　東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川又三郎

印刷者　東京市京橋區弓町廿四番地　金子久太郎

印刷所　東京市京橋區弓町廿四番地　三協印刷株式會社

著作權所有

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六番地　振替貯金口座東京四一〇九番　前川文榮閣　電話本局五七七番

高橋五郎先生著書目

釋迦論

菊判 定價金八十錢 郵稅十錢

一切の世慾を退けつゝ一切衆生の爲めに不退轉の誓を起せる大慈大悲の主の眞面目を著者獨特の精敏の見を以て詳論したるもの即ち是れ

人生觀

增町 菊判 定價金七十錢 郵稅十錢

本書は古今幾多の人生觀を掲擧して之に他全無病なる安心立命的大人生觀を既述せるもの、人間の人間たる本分を知らんと欲せば本書を讀め

宇宙觀

上製金壹圓五十錢 郵稅壹錢

高物の經長たるの人唯辭生滅死世は何なる我は何たるの理を知らずして有るべけんや本書道徳生は何は何死は何たるの理を闡明して又餘す所なし

人生哲學

菊判 定價金七十五錢 郵稅十錢

學問と宗教は本書を俟つて初めて學問の利階に達すと云ふべし蓋に是れ超絶絶倫の最大人生哲學！

最新 一元哲學

菊判 定價金五十錢 郵稅八十錢

著者が該博の識と深遠の考慮とは茲に一元哲學一篇を編出す。附錄に黑岩涙香「天人論」の一元主義を評論せる所痛快の著なりと謂ふべし

戰爭哲學

菊判 定價金四十錢 郵稅六十錢

出て、戰ふ者居て守る者共に戰爭の哲理を常に胸底に藏するを要す、本書が立論の嶄新なる所述すべからざるの著也

世界三聖論

菊判 定價金四十錢 郵稅六十錢

著者の犀利なる筆を以て世界に於ける三聖の眞面目をして紙上に躍如たらしむるもの即ち本書也矣

日蓮論

菊判 定價金六十錢 郵稅十錢

大日本の法華經と唱へて自ら國家の柱石を以て任じ權勢と戰ひ迫害に對せる英雄佛日蓮の異彩を詳述せるは本書一篇の消息なり

豫言者 宮崎虎之助君著

我が新福音

菊判 定價金四十錢 郵稅六十錢

佛蓮宮崎道名メシヤ佛陀、虎之助君抱負の大なる其名の炳乎たる世の既に知る所や如何なる福音をか傳ふる、今や我が新福音一篇を著す抑も

正岡藝陽君著

新時代の道德

菊判 定價金廿五錢 郵稅四錢

文壇の拋者大俗の牧師たる藝陽君新に新時代の道德なる一書を公にす氏が道德觀抑もや如何なる者をや窺らす

屈山 小室重弘君著

實驗雄辯學

菊判 定價金四十五錢 郵稅六錢

大演說家たる著者が多年の實驗に基き談論の秘訣雄辯の妙用を詳述せられたる者學生諸君が必ず一本を備ふべきの書也

獨乙ゲーテ原著 高橋五郎君譯

フアウスト

四六判 定價金七十五錢 郵稅十錢

ゲーテが傑作フアウストは今や拉し來りて高橋五郎先生が明快なる邦文に譯する所となる原文一行邦文一行一字一句をも苟くもせず文壇稀出の快著たり

獨逸ゲーテ原著 米國テーロル翻譯 高橋五郎君註疏

英文 フアウスト

四六判 定價金四十五錢 郵稅六錢

本書は英文の粹を選び必要なる註疏を附して初學者の便にせらる英學者獨研究の好伴侶

獨乙エッカルト原著 齊木仙醉君譯

譽の毒盃

菊判 定價金五十錢 郵稅八錢

獨逸文藝エッカルトの傑作にして材を希臘に取りたる大戲曲也ソクラテース、プラトン、ヘレナ、等幾多の登場人物は紙上に活躍す

海老名彈正先生著

耶蘇基督傳

菊判 定價金六十錢 郵稅十錢

井上博士の釋迦牟尼傳と相俟つて我讀書界多年の渴を充たしたるものは本書也 現今基督傳中の白眉！

文學博士 井上哲次郎先生著

釋迦牟尼傳

菊判 定價金六十錢 郵稅十錢

釋迦の史傳として尤も完全無缺なる又考證該博なるものは本書なり好評喧々隨筆として申込み絕えず內容推して知るべきなり

文學博士 高瀨武次郎先生著

王陽明詳傳

菊版洋裝 定價金七十五錢 郵稅八

王陽明の哲學性行學說を詳密平易に傳したる者は本書也有爲の士は陽明が成効の歷史を繙き簡易實用の學を味ひ玉ふべし

高島 圓先生著

一休和尙傳

菊判洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

元日に髑髏を振廻して人の度肝を抜き末期に酒を啖ふて梵天に捧げたる一休和尙は本傳に傳せられて餘す所なし

濱口惠璋先生著

雲衲大師傳

菊判洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

支那南北朝の時代黃河々畔龍門の地にありて徐ろに禪學の工夫を凝らし心靈慰安の道を宣べたる大師の傳を見よ

大內青巒先生閑峰玄光先生著

道元禪師傳

菊判洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

禪師の禪は遂に曹洞宗なるものを形造れり師が專修住行學說は本書傳へて餘蘊なし

小野藤太先生著

弘法大師傳

菊判洋裝 定價金四十五錢 郵稅八

密道の仙としての大師佛道啓發者として大師の傳は如何なる絆に依りて紹介せられたるか應幾くば來つて本書に其の眞似を知れ

梅澤和軒先生著

西行法師傳

菊判洋裝 定價金六十錢 郵稅八

歌仙としての法師求道者としての法師は著者が多年の研究に依りて玆に紹介せらる希くは諸士よ天地人生に對する眞詩人の心靈の響を聞け

文學博士 井上哲次郎先生著

菩提達磨傳

近刊 定價金七十五錢 郵稅八

文學博士 村上專精先生述

教理と實踐

菊判洋裝 定價金四十七錢 郵稅八

佛教研究の眼目とする所は教理の研究より寧ろ實踐窮行を重とす本書は尤も簡明に此の實踐を示せるものにして教理と實踐とあれ共大部分實踐に關するもの今や淨土は開かれたり彼岸に往生せんとせば遙かに本書に就けよ

ミルトン氏原著 高橋五郎先生譯

失樂園

近刊

原名パラダイス ロスト

失樂園の大作從來日月と光を爭ふ、其脚色の巧妙なる、其結構の雄なるや、宇宙を呑吐して綽々餘あり、冤王の冤罪を上に訴し、地獄を脚下に蹂躙す、天軍冤旗を靡かし、冥々空中に激戰し、電閃々々火炎々々逆に執れが勝ち、孰れか敗る、亦是れ人生の秘密を金剛の筆に描きて出せる者、高橋五郎先生の此譯亦原文一行譯文一行、綿細緻密加ふるに頭註の雄句を解くあり、パラダイス、ロストの眞面目始めて玆に見る可し、先生拾數年の苦心今や譯成る、乞ふ愛讀を賜へ、

文學博士 前田慧雲先生著

大乘佛教史論

菊判全一冊 定價金七十五錢 郵稅八

本書は大乘佛教の教理系統の異同を歷史的に考證したるものなり議論の明快と文辭の流暢とは的確なる考證と相俟つて一段の光彩を加ふ

舟橋水哉先生著

小乘佛教史論

菊判洋裝 定價金五十錢 郵稅八

原始佛教は今日所謂小乘教にして大乘教は後世佛說に據て演せし新說なり本書は小乘教の印度より支那に傳來せし實を蒐集して之に意見を加へ以て世人と日本に傳へんとするものなり希くは斯學研究の徒よ來つて本書を一卷を繙け

トルストイ伯著 加藤直士譯

我宗教

菊判洋裝 定價金七十五錢 郵稅八

伯を知らんと欲せば須らく本書に就け諦若本書を探りて心解貫通讀むて僅に三四行に至らば伯は從容として眼前に到らむ

及川恭次著 藤島武二畫 長原止水畫 赤松麟作畫 寫畫數十個入

地理讀本

菊判クロース裝 定價金六十八錢 郵稅八

極めて平易通俗に地理學に關する一般の智識を百文錢に換りたるもの家庭用として好適の教科書考用書たり

文學博士 南條文雄先生 文學博士 付上專精先生 文學博士 前田慧雲先生 監修

親鸞聖人全集

布板洋裝 上下各金壹圓 郵稅壹錢

苟も眞宗の流を汲み聖人の人格に接せんとする者は是非一本を座右に供て永劫の生命を彼岸に得よ

田中智學序 山崎紫紅君著

法華經物語

菊版洋裝 定價金五十六錢 郵稅六

佛典の中心たる法華經の光彩は日の天に於けるが如く佛壽の根機こゝに擊す 正法弘通の一助としてこの法華經物語は出てたり

新體女子用文

女子大學校教授 鹽井雨江先生著
學習院女子部教授 小野鷺堂先生著
女子大學校教授 中村春雨先生著

木版半紙摺 和裝 定價金七十五錢 郵稅六錢

現代時文の大家鹽井雨江先生の新作なる新體詩界の巨擘小野鷺堂中村春雨先生が浮著せられたるもの 加ふるに極上和紙に印刷し高尚幽雅なる製本の體裁は更らに錦上花を添ふるものと云ふべし

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著

千草の錦

文藝 和裝 定價金七十錢 郵稅十錢

先生が三十餘年間古學復興以來諸名家の文中男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語、歌等無慮數百篇を選出せられたるもの即ち本書也

中邨秋香先生新作 小野鷺堂先生著

新編手紙

男子用

木版半紙摺 和裝 定價金七十錢 郵稅十錢

男女各一冊

文の手ほどき

女子消息

本書は中邨秋香先生の新作を小野鷺堂先生が大学に著せられたるもの習字作文閨用の好著たり

定價金四十五錢 郵稅八錢

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著

古今集詳解

和裝美本 全四冊 定價金二圓十錢

合本總クロース箱入定價金二圓廿五錢郵稅廿四錢

國歌國文研究者に勿論我國文學の花を味はんとするもの は前人未發の解釋書たる本書を先づ繙け

中邨秋香先生著 小野鷺堂先生著

新編書簡文例

男子用

木版半紙摺 和裝 定價金六十錢 郵稅六錢

男女各一冊

新編女子書簡文例

本書の文例は秋香先生の惱殿を搖れる作、書は鷺堂先生が大手腕を振はれたるもの兩々相俟ちて眞個男女學生が好伴侶

定價金六十錢 郵稅六錢

中邨秋香先生著

新編書簡文法式

男子用

總クロース金字入 定價金五十錢 郵稅六錢

新編女子書簡文法式

書簡に法式を知らざるは尙人に禮なきが如し本書は今日の現狀に依り茲新を對照して以て時宜に從ひ適當の式を設けられたるものなり

定價金六十錢 郵稅六錢

高須五湖先生著

日露會話獨習

述成

總クロース金字入 定價金五十錢 郵稅六錢

露語の發音、文法より、日常必要なる各種の用語を網羅せるもの 以に當世會話の粹を集めたるものと言ふべし

渡部竹蔭君著

明治の家庭

四六判洋裝 定價金廿五錢 郵稅四錢

本書は我國現今の不完全不規則極まれる家庭を矯正せんが爲めに生れたるもの 家庭の王たるもの、必讀すべき良書也

陸軍少將龜岡泰辰校閲 軍事普及會編

徵兵問答

改正

四六判洋裝 定價金三十錢 郵稅四錢

本書は徵兵に關する凡ての事を記せるものにして國家の干城たる青年子弟が來るべき務の最大說明書也

綱島梁川先生著

病間錄

布裝 定價金一圓廿錢 郵稅十錢

本書は著者內生活の實錄にして 神秘久遠の海潮音を傳へたる近代的默示錄也

綱島梁川先生著

同光錄

布裝 定價金壹圓廿錢 郵稅十二錢

法悅と健鬪とを合せ得たる靜寂にして而も積極的なる著者の面目と其聖生活の消息を知らんと欲する者は來つて此の同光錄一卷を繙け

中村春雨先生著

新約物語

布裝 定價金十壹錢 郵稅十壹錢

舊約物語

布裝 定價金壹圓五十錢 郵稅十二錢

基督教の眞趣を家庭に傳へんが爲めに著者が苦心の大成せしめたる通俗の聖書にして最も平易に編述せられたるものなり

神學博士 三並良 先生譯

オルデンベルク氏

佛陀傳

總クロース金字入 菊判五百餘頁 定價金壹圓八十錢 郵稅十二錢

本書は南方佛教を詳說せられたるものにして彼の錫蘭島に傳來せる「パリー」の經典に基き最も精密に最も嚴格に多年の積學を傾注して譯せられたるものなれば現時の佛教界に唯一無二の好參考書たるを疑はず 亦た該者の机上に見へんとす

安部磯雄君著

理想の人

四六判 洋裝 定價金七十錢 郵稅八錢

虚偽虚飾の貴族的道徳を痛罵して眞摯純朴の平民的道徳を鼓吹し高尚なる士君子と磨瑳なる市民の眞面目を發揮したるもの即ちこれ

山路愛山君著

支那思想史

四六判 洋裝 定價金四十五錢 郵稅八錢

自家の研究は自家知る東洋の思想は東洋の人自ら解釋せざるべからず著者の此論を發くや久し此書即ち之を實にするもの〻一也

浩々歌客君著

鷗心錄

四六判 洋裝 定價金六十錢 郵稅六錢

現代文壇に獨歩する逸觀明識異彩ある雄麗高華の文章は收めて此の鷗心錄にあり江湖讀書社會の多々益々味ふべき絶好文字也

堺枯川君著

婦人問題

四六判 洋裝 定價金四十錢 郵稅六錢

著者は現社會主義者中の翰々たるものにしてまた家庭問題婦人問題に關して此主義に立つ一家の見を有す抑もや如何なる論をや有する

海老名彈正先生著

靈海新潮

洋裝 函入 定價金八十錢 郵稅八錢

著者が滿天下に號叫せる最大説教を綜めたるものにして現代宗教上の實際問題に於ての解釋を試み其根本の要義を提示せるもの也

高木壬太郎先生著

基督教安心論

洋裝 布製 定價金七十錢 郵稅八錢

著者が聖書及文壇より赤誠を披瀝したるものにして基督教の立場より安心の道を説きたる者人生問題は本書に依て初めて解決せられん

清澤滿之先生著

懺悔錄

洋裝 布製 定價金七十錢 郵稅十錢

自河派の領袖として多年聲名せる本山の陋習を打破せんと試みたる教壇上の勇士清澤先生の遺著也如何なる事か懺悔せる！

浩々洞同人著

沈思錄

洋裝 布製 定價金六十錢 郵稅十錢

讀者は熱湯を飲むが如き煩悶の中に本書を繙ひて其清涼の氣に觸れ以て宇宙の大靈の救濟に接し安住の天地に入らんとはし給はずや

瀧精一先生著

藝術雜話

洋裝 布製 定價金壹圓 郵稅十錢

何人にも理解し易く所謂應用美學の一書として美術家賞鑑家には勿論荷も美術に趣味を有する人々の必讀すべき書は本書也

上田敏先生著

文藝講話

洋裝 布製 定價金壹圓 郵稅十錢

萬般の藝術に就きて現時公にせられたる泰西思潮研究の講話集也著實識見なる態度を以て高遠精緻の既を述ぶる所他に其比なし

五十嵐力先生譯

兒童の研究

洋裝 布製 定價金壹圓 郵稅十錢

人の性格の固定するは兒童教育の眼目也後來の教育の根本實に兒童教育にあり子を預れる教師人性の芽崩に美しき枝振をなさしめんとせば本書を讀め

建部遯吾先生著

靜觀餘錄

洋裝 布製 定價金壹圓廿錢 郵稅十二錢

冷かなること水の如くにして透徹玉を欺き犀利なる觀察は事物の眞に徹底す靜觀餘錄の滋味潺湲として流るゝ泉の如く掬せば即ち玲瓏の響あり

山路愛山君著

社會主義管見

四六判 洋裝 定價金三十錢 郵稅四錢

此書は山路愛山先生が其主義を發表せられたる一大論文也語は平易に意は深く全卷假名付にして何人にも解し易からしむ

木下尚江君著

懺悔

四六判 洋裝 定價金廿五錢 郵稅四錢

懇に惱み死生に惱みたる著者が始めて人生の奥義に觸れて翛然新生活に蘇進せんとする歌の宣言書也

高濱虛子君著

俳諧一口噺

四六判 洋裝 定價金五十錢 郵稅六錢

俳諧一口噺は子規氏の圖確に對して俳文の時代的變遷及進歩を示す盛子氏の文は輕妙あり深あり其内面的觀察は獨特の長所なり

河東碧梧桐君著

俳句評釋

全一冊 洋裝 定價各金廿五錢 郵稅各四錢

本書は猛烈な詳注せるもの初學者は勿論已に堂に上りたるものにも必讀の貴參考書也

綱島梁川先生著

寸光錄

上製箱入 定價金一圓廿錢 郵稅八錢

其一字一句にも尚ほ靈光の的確たるの認らるゝありて中には動かざる眞理の下に成れる一の教條として注目すべきさへあり殊に先生が如何にして見神の境に到達せるかに就て研究せんとする人に取りては唯一の案なるのみならず修養に志ある人は必ず一讀の價値あり

綱島梁川先生著

梁川遺稿 書簡集

上下各一冊 定價金一圓十錢 郵稅八錢

世にありふれたる書簡集の類にあらず無慮壺千通に垂れたる中より嚴に選擇せられたるものなれば內容の善美は推して知るべきなり彫心鏤腑の文に比べて如何に亦探々の趣味性格交遊及び周圍を知らんと欲する諸君は必ず本書に來らざる可からず

綱島梁川先生著

歐洲倫理思想史

定價金一圓五十錢 郵稅十二錢

梁川先生が倫理學者としていかに一派のオーソリティーたりしかは今に茲に吹々を要せざる可し木書は先生が數多の倫理著書中最大最後のもの殫精竭慮の見傾けて此に玉りては將に是れ先生の天才にあらずんは能はざる所なり

綱島梁川先生著

我觀錄

定價金一圓廿錢 郵稅八錢

本書は『寸光錄』と相俟ちて先生が宗教的生活の思想史を完成せるものなるが故に『寸光錄』に其一半の消息を解したる諸君は更に遡つて本書に就かざるべからず

綱島梁川先生著

病窓雜筆

定價金一圓十錢 郵稅八錢

本書は實に最も完成せる先生の遺品にして其二三の世に公にせられたるを除きては悉く是れ先生が永逝前數日病苦の最難關中にものせられたる血涙の文字なり

山路愛山先生著

日本思想史 近刊

先生平生の蘊蓄を傾けて日本精神界を辯論し英雄を縱橫に評論す其評する所痛快論ずる所深刻此の思想の變遷は歷史の骨髓にして歷史の要點は此に盡きたりと云ふも可なり自家の研鑽自家知る日東の思想は日東の人自ら解釋せざる可からず著者此論を讀くや久し 此書即ち之を實にするものゝ一也

蕪村先生眞筆

俳諧三十六歌仙

大本美濃摺 定價金壹圓錢 郵稅十錢

俳諧三十六歌仙は俳聖蕪村が古來の俳仙三十六人を撰んで其風を描き俳仙が一代の名吟を以て之に贈したる也 刷美本也

子規先生自筆

俳人芭蕉

大本美濃摺 定價金壹圓錢 郵稅十錢

子規氣手の形及俳詠額面用檀箋紙 河東碧梧桐氏寄簡木版刷付古風帙入製本

澁川玄耳君著

東京見物

四六判洋裝 定價金五十錢 郵稅六錢

田舍漢鼓野椋十問扳面を洒して東京を見物し記事を東京朝日新聞に掲げて文名忽ち文壇を壓す朴訥漢が東京觀抑もや如何

伊藤銀月君著

五十三次 草鞋日記

四六版美裝 定價金五十錢 郵稅六錢

景と俗と人と我と苦活きて陷り今代を經として前代を律として綴りなす錦天下稀有の珍書とは所也

木下尙江君著

小說 靈か肉か

全二冊洋裝 定價各金四十錢 郵稅各六錢

小說「火の柱」「良人の自白」に其革命的思想と熱烈火の如き筆とを示したる著者が新生活に入る第一段階の小說は即ち之れ

木下尙江君著

小說 火の柱

四六判洋裝 定價金三十五錢 郵稅六錢

革命の戰士社會主義の鼓吹者たる著者が新に採りたる小說の筆の如何に新生面を出せしか著者自身の告白を見よ

木下尙江君著

小說 良人の自白

上中下各金卅五錢 郵稅各六錢 樽箱五十錢 郵稅八錢

著者が主張信仰の具體的說明たる本書は苦鬪せる青年を新曙光を仰ぐの希望に入らしむるもの也

中村春雨君著

小說 密航婦

布裝美裝 定價金七十錢 郵稅八錢

人の心も靈霜の冷たき來き世の中に乙女心の繼の花咲き出でん春にはあはで遂に枯れ行く身なるべきか嗚呼密航婦！

伊藤銀月君著

豆相名勝 **草鞋日記**

銀月自筆挿入 定價金五十錢 郵稅六錢

『哲學雜誌評』著者が草鞋脚絆に身を堅め尻端折つて袍と蝙蝠傘をヒッかついて鎌倉を舟出して三浦半島の三崎域が島から葉山逗子を過つて鎌倉に出で江の島から大磯小田原熱海を經て箱根の湖から湯本に至る迄の間或は著者の風景論も出づれば地質學的觀察もあるそふかと云ふと二合の酒に醉を買つた大膽な自己も表はれて來る頗る珍妙な面白さが溢て出る附錄としての『下駄日記』は那須野温泉の案内記で前の『草鞋日記』とは一寸趣きを異にして興多く讀まれた眞に無二の好案内記なり

伊藤銀月君著

山陽道中 **草鞋日記**

銀月自筆挿入 定價金五十錢 郵稅六錢

風景と歴史と双絶なる山陽道の草鞋日記は曩に讀書界を傾倒せしめし五十三次のそれに比して一段精采を加へ一段著者の面目を發揮せり奇拔奔騰縱横出して應接に暇あらざる間に山陽道の風景及び住民の特色は犀利精透に描き出ださる且つ山陽道には著者が崇拜する秀吉の傳記と大關係ある土地多きを以て著者の筆は最も此一面に光焰を放てり故に本書は或る意味に於て『山陽道風景論』たると共に亦趣味深き『秀吉傳』たるなり

文學士高田梨雨著

科學小說 **空中戰爭**

コロタイプ 定價四十錢 郵稅六錢

大洋に浮ぶ艦隊の威も『空中の征服』でふ世界の流行語の飛行機の後へに瞠若しめられんとす將來の戰爭及競爭は空中に開始されん獨逸のツェッペリン飛行機が一時間我十六里半の速力を以て能く六十時間の飛行に堪へたる數回の證明は最早成功を疑ふ餘地なし本書は現今列國の遂す程度を盡り今後科學の力に由りて發達する範圍を深想し錯綜せる國際關係發明家奇人大偉人を以てし國の空中艦隊が曙洲問み出發し日清空中艦隊の出發世界の波瀾となる眞に肉躍り血湧く爽絶の空中戰爭記なり著者氣球協會發起人なれば坊間の冒險小說及空中戰爭と選を異す

薄田泣菫先生編著

名家書翰集

定價金六十五錢 郵稅金八錢

本書は廣く古今名家の書翰中より最も趣味ある珍品のみを選擇せるものなれば眞に赤裸々なる名家の面目を知らんと欲する諸君は必ず繙讀せざるべからざると共に又書翰文の好模範たるを失はざるべし新時代の新書翰は如何に草すべきか本書は幾多の趣味ある而して簡潔なる筆によりて之が實例を示せり男女學生の好伴侶として又家庭の好寶鑑として廣く江湖に推奬せんとす

田邊和氣子刀自著

新撰 **女禮鑑**

定價金五十錢 郵稅金八錢

本書は和氣子刀自が實際的方面に重きをおき尤も慈篤忠實に著はされたる著淑女夫人は勿論禮儀の寶鑑として家庭に備へざる可からず

實業倶樂部主筆藤田日東先生著

官吏 會社員 商店員 **實驗立身訓**

定價金五十錢 郵稅金六錢

著者青春にして官憲に在りて某大學に學び出ては會社商店新開社に就職し得たる實驗を綜し慈篤忠實に著はされたるもの學校生活あり社會生活あり任用制度あり奉職逆境法あり就職比較あり實務の練習あり就職の勝筌と榮達の呼吸に至つては眞に無比青年社會に立たんとする羅針盤たる筌に其名に反かず

宮崎八百吉先生著

精神科學 **宇宙と人生**

定價金六十錢 郵稅金八錢

實驗的宇宙精神の羅感者たる著者が吾人の經驗に依りて見神を實現し得べきかと言へる人生の最大疑問と科學者の所謂宇宙の謎に經的解釋の新光を與へたり科學者宗教家必ず讀まざるべからず

碧瑠璃園著

乳人政岡

全三冊 定價各金七十五錢 郵稅各金八錢

世に千代萩を知らざる人あらざらんなれど本書の如く流暢の文を以て遺憾なく實歴を描きたるものはなし稚健なる家庭趣味ある家庭は必ず愛讀せざるべからず

古恩芽主人著

家庭小說 **ゆるさぬ關**

定價金壹圓 郵稅金十二錢

『時事新報評』ゆるさぬ關は時代小說と云ふよりも世話物と云ふ適當とすべし眞に舞臺を靡末時代に採り其時代の人情風俗を其儘に如色したる者興味中心の小說として確に成功せる作なり筋と變化に富み曲折多く叙事も手に入つたものにて到底かけ出しの新作家などには及びもならぬはなれ業なり一身を賭して夫の放埒をかばひこれを死諫する紬乃の良節は讀む人をして思はず卷を敢ふて泣かしむ近時異色の小說として洽く江湖に廣むるを得む

朝倉無聲先生著

日本小說年表

定價金壹圓 郵稅金八錢

本書は著者五ヶ年の苦心捜索結果編纂せしものにして上は平安朝物語より下は明治に至るまで採錄する所の小說大小一萬五千部之を大項細目に分類し又年代順に配戴して解題註釋をも加へ卷末には詳密なる索引を添へたり